

(五) 閻、延、蔣 (オ) 王  
一九二九年遼寧基督教青年會總幹事となり又同年國民外交協會を發起し自ら主席委員となり滿洲事變前に至る。同年十月京都に於ける第三回太平洋問題調査會に支那代表として出席す。一九三〇年任瀋陽市政委員。一九三一年國民會議遼寧省代表たり。滿洲事變に際しては北平にて滿洲擁護協會を起し活動せり。其後江西省南昌に於て新生活運動の主動者となる。

閻錫山 (Yan Hsi-shan) (Pao-shan) 山西省五台縣人。一八八三年生。日本陸軍士官學校第六期步兵科卒業。日本留學中中國同盟會に加入す。第一革命に際し兵を太原に率け奉に推されて山西都督に就任。山西省、獨立を宣し清軍と戦ひて破れたるも南北統一後正式に山西都督に任ぜらる。一九一六年任山西都督。一九一七年兼任山西省長。爾來十餘年専心省治に努め中央の政争に關與せず保衛安民を主旨として實業を獎勵し民治の發達に盡力し治績大いに挙げ山西省は模範省を以て稱せられ閻は模範都督と稱せられたり。一九二五年將軍を改め山西軍務事宜將辦に任ぜらる。一九二六年馮玉祥の國民軍が山西侵入を企つるや奉天軍、吳佩孚軍と協力して國民軍を驅逐し安國軍副司令に就任せるが後奉天派と決裂し國民政府と結び一九二七年南京國民政府委員、次で國民革命軍北方總司令に任ぜられ其他政府の要職を兼任す。一九二八年奉天伐軍に加はり國民革命軍第三軍團總司令兼太原政治分會主席として奉天軍と戦ひ之を關外に驅逐す。同年北伐完成後後津衛戍總司令に任ぜられ北平に入り孫文の慰靈祭に横々南北巨頭の軍事會議に参加す。一九二九年任陸海軍副司令。間もなく馮玉祥、汪兆銘等と蔣介石一派との間に紛争起り當初は中立的態度を執り兩者の調停に努めたるも後遂に反蔣側に加はり一九三〇年馮玉祥、汪兆銘、謝持等と共に北京に新政府を樹立し閻は政府主席兼陸海軍總司令に就任し兵を山東、河南に進めたるも張學良が蔣側に加担し武裝調停を宣言するに及んで河北を棄て山西に退き次で大連に亡命す。一九三一年石友三が反蔣軍を興すや潜かに太原に歸還せるも石軍の敗退により事成らず。爾來五台山に閑居して遙に廣東政府と呼應して反蔣策動を續け居たる處同年末蔣介石國民政府主席を辭して廣東派との妥協成るや四も再び國民政府に歸參し一九三二年三月任太原綏靖主任。第四期中央執行委員。一九三五年任第五期中央執行委員、軍事委員會副委員長、一九三六年任綏遠各盟旗地方自治指導長官。

東、河南に進めたるも張學良が蔣側に加担し武裝調停を宣言するに及んで河北を棄て山西に退き次で大連に亡命す。一九三一年石友三が反蔣軍を興すや潜かに太原に歸還せるも石軍の敗退により事成らず。爾來五台山に閑居して遙に廣東政府と呼應して反蔣策動を續け居たる處同年末蔣介石國民政府主席を辭して廣東派との妥協成るや四も再び國民政府に歸參し一九三二年三月任太原綏靖主任。第四期中央執行委員。一九三五年任第五期中央執行委員、軍事委員會副委員長、一九三六年任綏遠各盟旗地方自治指導長官。

閻錫山 (Yan Hsi-shan) (Pao-shan) 山西省五台縣人。一八八三年生。日本陸軍士官學校第六期步兵科卒業。日本留學中中國同盟會に加入す。第一革命に際し兵を太原に率け奉に推されて山西都督に就任。山西省、獨立を宣し清軍と戦ひて破れたるも南北統一後正式に山西都督に任ぜらる。一九一六年任山西都督。一九一七年兼任山西省長。爾來十餘年専心省治に努め中央の政争に關與せず保衛安民を主旨として實業を獎勵し民治の發達に盡力し治績大いに挙げ山西省は模範省を以て稱せられ閻は模範都督と稱せられたり。一九二五年將軍を改め山西軍務事宜將辦に任ぜらる。一九二六年馮玉祥の國民軍が山西侵入を企つるや奉天軍、吳佩孚軍と協力して國民軍を驅逐し安國軍副司令に就任せるが後奉天派と決裂し國民政府と結び一九二七年南京國民政府委員、次で國民革命軍北方總司令に任ぜられ其他政府の要職を兼任す。一九二八年奉天伐軍に加はり國民革命軍第三軍團總司令兼太原政治分會主席として奉天軍と戦ひ之を關外に驅逐す。同年北伐完成後後津衛戍總司令に任ぜられ北平に入り孫文の慰靈祭に横々南北巨頭の軍事會議に参加す。一九二九年任陸海軍副司令。間もなく馮玉祥、汪兆銘等と蔣介石一派との間に紛争起り當初は中立的態度を執り兩者の調停に努めたるも後遂に反蔣側に加はり一九三〇年馮玉祥、汪兆銘、謝持等と共に北京に新政府を樹立し閻は政府主席兼陸海軍總司令に就任し兵を山東、河南に進めたるも張學良が蔣側に加担し武裝調停を宣言するに及んで河北を棄て山西に退き次で大連に亡命す。一九三一年石友三が反蔣軍を興すや潜かに太原に歸還せるも石軍の敗退により事成らず。爾來五台山に閑居して遙に廣東政府と呼應して反蔣策動を續け居たる處同年末蔣介石國民政府主席を辭して廣東派との妥協成るや四も再び國民政府に歸參し一九三二年三月任太原綏靖主任。第四期中央執行委員。一九三五年任第五期中央執行委員、軍事委員會副委員長、一九三六年任綏遠各盟旗地方自治指導長官。

### オ之部

王國燾 (Wang Kuo-sung) 上海人。一九〇〇年生。英國エヂンバラ大學卒業。歸國後漢口聯合病院の耳鼻喉外科醫として活動す。  
王以仁 (Wang Yen (Ching-so)) 浙江省台州人。一九二六年失戀の結果失跡す。生前に創作集「孤雁」あり、死後友人諸氏は遺作を集めて『幻滅』を刊行す。

王以哲 (Wang I-tse) (I-tse) 吉林省資陽縣人。一八八八年生。一九一六年吉林第一中學卒業。保定軍官學校を一九二三年卒業。東三省陸軍教導隊第四連排長。一九二五年第三營長。第四補充旅第八團長。第二十七旅第三十九團長。第三、第四方面軍團衛隊上校隊長。衛隊旅少將旅長。第十九師中將師長。陸軍第一旅旅長。第七旅旅長。この時北平に駐屯し、滿洲事變の端を啓けり。日本軍と戦つて敗れ、關内に退く。北平軍分會第一處長。第六十七軍長を経て一九三五年第五期中央執行委員に當選。學長に隨つて陝西に移駐し、第二十七軍長。一九三七年二月西安に於いて孫銘久の叛亂に因り殺害す。

王維克 (Wang Wei-to) 江蘇省金壇縣人。一九〇〇年生。佛國巴里大學理科卒業。中國科學社及中華自然科學社々員。商務印書館編輯、中國公學教授、湖南大學教授、鎮江圖書館閱覽部主任、世界書局々外審訂等に任ぜる。現在は家居蘇州に從事す。譯書「フランス名劇四種」「青島」「シヤンタラ」「フランス文學史」等。

王維藩 (Wang Wei-fan) (Yun-fan) 河北省清苑縣人。一八八五年生。日本法政大學及高等師範學校卒業。察哈爾教育廳長、北京師範學校々長、國民政府禁煙委員會秘書長、禁煙委員會委員兼總務處々長、銓敘部秘書等に任ぜる。

王郁 (Wang Yu) (Yu) 河北省通縣人。一八八八年生。湖北高等警察學校卒業。曾て前清外城巡警總廳委員、貴州法政學堂會計官たり、民國後蒙藏院會計、編纂庶務科長、統計科長、編纂科長、總務處秘書、臨時參政院參政、蒙藏委員會古北口驛站局長、上海招商局總管理處金庫主任、天津市政府秘書等に任ぜる。現に北平市政府第一科々長。

王毓慶 (Wang Yu-kun) (Jang-kung) 湖南省攸縣人。

國民政府最高法院檢察廳檢察官。

王毓芝 (Wang Yu-chih) (Chieh-shih) 山東省濟寧縣人。一八七八年生。早くより曹錕の幕下に在りて終始曹と行動し共に山東省議會黨秘書長、同黨黨長代理、奉天省巡撫秘書、長江上游司令秘書を経て一九一五年任直隸將軍公署秘書長。一九一六年任直隸省長公署秘書長。一九一八年任四川、廣東、湖南、江西四省總督使公署秘書長。一九二〇年安直職起るや直隸軍司令部秘書長たり同年任遼寧省公署及直隸省總督府秘書長。一九二三年任全國禁煙事務督辦。一九三三年任大總統府秘書長。一九二四年秋直隸派の没落、曹錕の下野と共に辭職し爾來天津に閑居す。

王毓謙 (Wang Yu-chien) (Chieh-shih) 湖南省衡陽縣人。米國紐約大學卒業。國立東南大學商科、吳淞中國公學商科及國立東南大學商科教授、廈門大學商科主任、全國電政總局科長、上海大廈大學秘書處發展委員會主席、交通部電信學校々長等に任ぜる。

王育仁 (Wang Yu-jen) 河北省通化縣人。一八八八年生。一九一六年通化中學卒業後北洋法政及直隸高等工業專門學校にて修學。次で保定陸軍官講習團を卒業。下級軍人として多年在任。一九二八年通化指揮委員となる。一九三〇年閻馮の變亂の時天津に閉居されしも一九三一年黨務復活と共に續いて通化與陳雨農黨務委員となる。一九三三年任河北省黨部幹事。

王一之 (Wang I-chih) (I-chih) 浙江省杭州人。一八七七年生。米國ワシントン大學卒業。上海申報編輯、駐巴西公使館三等秘書、駐暹羅公使館二等秘書、國際聯盟代表辦事處三等秘書等に任ぜる。著書「米國旅行紀實」。

王一民 (Wang I-min) 奉天省新賓縣人。一八八八年生。日

(オ) 王

(才) 王

本陸軍士官学校卒業。夙に奉天軍に在りて擢進し東北邊防司令官長官公署作戦科長、同參謀處長、同副官長及天津保安總教練、同保安總隊長、同特務總隊長、同勤務督察長、天津戒嚴司令、天津市政府公安局長等に歴任。

王 遜軒 Wang Lishan 平漢鐵路管理委員會委員。

王 尹 Wang Yin-sheng 湖南省長沙人。一八七一年生。長沙商會常務委員、賑濟局委員。曾て賑々長沙商會長たり。一九三四年病歿。

王 尹 西(雲君) Wang Yeh-shan (Yung-shan) 江西省吉水縣人。一八九三年生。多年廣東省政府參議たりしが一九二九年粵軍江西省政府主席たるに及び擢られて省政府委員兼民政廳長たり。一九三一年任江西地方整理委員會委員、陸海空軍總司令行營參政委員會政務設計委員として共濟軍討伐に参加す。

王 印 川(月波) Wang Yin-chuan (Yue-pa) 河南省修武縣人。一八七八年生。早稻田大學政治經濟科卒業。第一革命黨時河南高等學堂教務長を辭して上海に赴き于右任の『民立報』記者となり宋教仁、馬君武、章士釗等と共に革命思想の宣傳に努む。民國成立後河南運川參議院議員となりてより其世凱に隨ひ統一黨組織に参加し同黨副總理たりし、其の帝制問題起るや之に反對し段祺瑞と結ぶ袁の死後參議院副議長及衆議院秘書長として對段參議院の議會通過に協力す。一九二〇年河南省長に就任せるも同年安直に因る安徽派の失脚と共に辭職。一九二四年奉天軍入關し段祺瑞臨時執政たるに及び臨時參政院參政となり其後安國軍政治諮詢會、豫北團防總指揮等に歴任。一九二八年奉天軍關外撤退後大通に亡命す。爾來天津、大通間を往來し政治運動を續け居たる處一九三〇年末露支會議開かるや莫德惠に從ひ秘書として莫斯科に赴く。歸國後『蘇俄考

一八

察記』を著し世に行はる。一九三四年任安徽省政府委員兼秘書長。

王 遜 遜(雲君) Wang Yin-shan (Yung-shan) 浙江省紹興縣人。一八八六年生。一九〇六年日本第一高等學校卒業後獨逸に赴き一九二二年柏林大學法科を卒業す。一九二三年歸國後北京政府國務院法制局に入り累進して參事となる。其間一九二三年北京大學法科講師、一九二七年高等檢察廳檢察所判事、同年日本特派使節、一九二九年政務廳管理處法律顧問及廣島特派使節、一九二〇年東倫宜撫使總務處長を夫々兼務す。一九二二年辭職して奉天に赴き張作霖の顧問となり漸次重用せられて奉天外交の樞機に參與す。一九二六年北京に於て段祺瑞失脚し奉天勢力の中央に進展するに及び杜建珪内閣の外交次長に任せられ關稅會議支那代表、露支交涉委員會長等を兼ね顧維鈞内閣に留任す。一九二七年張作霖大元帥に就任し潘復内閣成るや外交總長に任せられ條約研究會副會長及中華銀行總行總理を兼ね。一九二八年司法總長に轉任し關稅自主委員會委員たりしも奉天派北京退去と共に奉天に歸る。其後官界を退き上海に在りて辯護士を開業す。王式通の子なり。

王 雨 生 Wang Yu-sheng 江蘇省溧陽縣人。國立東南大學卒業。在學時代學生自治會主席。國立東南大學教授兼註冊主任、中華職業學校商科主任、國立上海商學院會計教授に歴任。現在國立東南大學會計教授並に會計師の職務を行ふ。著書『會計原理』。王 雨 桐 Wang Yu-tung 浙江省杭縣人。一九〇三年生。日本明治大學卒業。會計師の資格を有す。各種學術團體に加入す。滬江大學商學院教授、通成公司總辦事處事務科長等に歴任。現に金城銀行總經理秘書。著書『中國之對日債務問題』、『最近之東北經濟與日本』。

王 雲 五(瑞麟) Wang Yun-wu (Hsiao-tai) 廣東省中山縣人。

一八八七年生。獨學。第一革命黨時東洋中國公學に教授を執り胡適其他當代名士を多く其門下より出だす。一九二二年南京臨時大總統孫文の秘書となり同年任北京政府教育部專門教育司長及教育次長代理。一九二三年任中國大學教授及北京民主報記者。一九二六年任全國領袖編輯處長。同年秋より一九二七年迄江蘇、江西、安徽各省黨務特派員たり。其後編輯事業に従事し一九二〇年上海商務印書館編輯長となり東亞圖書館理事、上海圖書館會長を繼ぐ。一九二八年南京國民政府大學院編輯一委員會主任委員等を兼任す。一九二九年商務印書館編輯長を辭し國立中央研究院社會學研究所法制組主任兼研究員に任せらる。後商務印書館に復歸し總經理兼研究所長、東方圖書館長。日、英、佛、獨語に通じ政治、法律、教育、歴史、及自然科學の造詣深。

王 永 江(述漁) Wang Yung-chang (Min-tsun) 關東州金州人。一八七一年生。前清時代より奉天官界に在りて警察官、縣知事、稅捐局長及三省總督府參事等に歴任。第一革命黨後奉天都督趙爾巽の秘書、奉天民政使等たりしが一九一六年張作霖の省政改革に際し奉天全省警察廳長兼省警務廳長等に任せられ從業湯玉麟一派の軍官派に依り離職せられ居たが省警務行政の大刷新を行ひ漸次改革の實を擧ぐ。次で一九一七年奉天財政廳長兼東三省官廳警務廳に任せられ多年磨せる奉天省財政に根本的整理を斷行し數年ならずして負債を償還して尙數千萬圓の剩餘を生ぜしむ。一九二二年奉天省長代理となり一九二三年奉天省長兼印花稅廳長及東北大學校長に就任鋭意内政の改革を行ひ治績見るべきものありしが張作霖の武力偏重、關内進出政策に反對し再三諫言せるも容れられざりしを以て一九二六年辭職し金州に隱棲して出でず。一九二七年病歿す。享年五十五。

(才) 王

王 遜 遜(雲君) Wang Yin-shan (Yung-shan) 浙江省紹興縣人。一八八六年生。一九〇六年日本第一高等學校卒業後獨逸に赴き一九二二年柏林大學法科を卒業す。一九二三年歸國後北京政府國務院法制局に入り累進して參事となる。其間一九二三年北京大學法科講師、一九二七年高等檢察廳檢察所判事、同年日本特派使節、一九二九年政務廳管理處法律顧問及廣島特派使節、一九二〇年東倫宜撫使總務處長を夫々兼務す。一九二二年辭職して奉天に赴き張作霖の顧問となり漸次重用せられて奉天外交の樞機に參與す。一九二六年北京に於て段祺瑞失脚し奉天勢力の中央に進展するに及び杜建珪内閣の外交次長に任せられ關稅會議支那代表、露支交涉委員會長等を兼ね顧維鈞内閣に留任す。一九二七年張作霖大元帥に就任し潘復内閣成るや外交總長に任せられ條約研究會副會長及中華銀行總行總理を兼ね。一九二八年司法總長に轉任し關稅自主委員會委員たりしも奉天派北京退去と共に奉天に歸る。其後官界を退き上海に在りて辯護士を開業す。王式通の子なり。

一九

王 雲 五(瑞麟) Wang Yun-wu (Hsiao-tai) 廣東省中山縣人。

王 永 慶(瑞麟) Wang Yung-chang (Yung-shan) 奉天省北鎮縣人。一八九二年生。一九二九年露支紛争に際し團長として札蘭諾爾に遠征と戦ひ、捕虜となる。一九二〇年任東江第十五旅長。一九三一年獨立第二十九旅と改稱後引續き旅長たり。同年軍を率ゐて入關一九三二年義勇軍に改編す。

王 永 泉(百川) Wang Yung-chuan (Po-chuan) 河北省天津縣人。一八七六年生。日本陸軍士官學校第四期工兵科卒業。一九一八年中央陸軍第二十四混成旅長として福建省に入り一九二三年任建安護軍使。同年任興泉永護軍使兼福建省警務處事務官。一九二四年孫傳芳に對抗して延平に據つて福建の獨立を宣言せるも敗れ爾來天津に歸り閑居す。

王 雲 五(瑞麟) Wang Yun-wu (Hsiao-tai) 廣東省中山縣人。

王 遜 遜(雲君) Wang Yin-shan (Yung-shan) 浙江省紹興縣人。一八八六年生。一九〇六年日本第一高等學校卒業後獨逸に赴き一九二二年柏林大學法科を卒業す。一九二三年歸國後北京政府國務院法制局に入り累進して參事となる。其間一九二三年北京大學法科講師、一九二七年高等檢察廳檢察所判事、同年日本特派使節、一九二九年政務廳管理處法律顧問及廣島特派使節、一九二〇年東倫宜撫使總務處長を夫々兼務す。一九二二年辭職して奉天に赴き張作霖の顧問となり漸次重用せられて奉天外交の樞機に參與す。一九二六年北京に於て段祺瑞失脚し奉天勢力の中央に進展するに及び杜建珪内閣の外交次長に任せられ關稅會議支那代表、露支交涉委員會長等を兼ね顧維鈞内閣に留任す。一九二七年張作霖大元帥に就任し潘復内閣成るや外交總長に任せられ條約研究會副會長及中華銀行總行總理を兼ね。一九二八年司法總長に轉任し關稅自主委員會委員たりしも奉天派北京退去と共に奉天に歸る。其後官界を退き上海に在りて辯護士を開業す。王式通の子なり。

(才)王

吳服業、上海市黨部常務委員、大新報編輯局の主人。所謂浙江財閥中の一人。吳興業に従事する傍ら黨部に關係し、從來歴次の排日運動の主動者にして、一九二八年上海反日暴行委員會副主席委員たり。全國反日會成立するや、上海特別市黨部代表として之に参加す。現に上海市黨部常務委員の外、上海市商會常務委員、商品陳列委員會委員等を兼任す。

王 濤 (濤) Wang Tao (Wang Tao) 江蘇省崑山縣人。一九一〇年生。上海東亞同文書院卒業。上海大夏大學卒業。學生時代より日本問題に興味を有し、同文協進會、日本經濟研究會、日本統計學會、大夏學會等の學術團體に加入す。現に上海時事新報日本特約通信員及新聞報、申報特約通信員、譯書「歐洲各國之經濟合作」。

王 家 (仲) Wang Chia-chi (Chung-chi) 江蘇省華亭縣人。一九一七年生。美國ミシガン大學卒業 (哲學)。歸國後任國立中央大學動物學副教授。

王 穆 (穆) Wang Mu (Wang Mu) 江蘇省人。一九一六年生。元上海小沙路の職工たり。労働者運動に手腕を有し、組織せられ、曾て全國總工會聯絡員として主として日本關係紡織職工の運動に努めたり。先に中國共產黨江蘇省委員たりしが、一九三二年江西省瑞金に中華ソビエト共和國臨時政府成立するに及び任外交人民委員長。

王 家 (漢) Wang Chia-han (Hsueh-han) 浙江省紹興縣人。一九一三年生。日本に留學し醫學を専攻す。前清時代浙江全省警察廳辦官、奉天警察廳等に任ぜられ、一九二二年第一革命後の議會に參議院議長に選ばれ憲法制定委員、憲法會議議長を兼任し、一九二三年大總統選舉委員長として袁世凱を民國第一回の大總統に選舉す。一九一四年任參政院參政。一九一六年袁世凱死後の議會に

二〇

再び參議院議長となり議會解散後英支合辦中鐵業公司の理事たりしが、一九二二年第一次奉直戰後の議會に三度參議院議長に就任す。一九三三年以來天津に隠棲す。

王 家 (瑞) Wang Chia-shui (Shuei-shui) 奉天省新民縣人。一九一五年生。奉天法政專門學校卒業。國務院印務局秘書、華府會議支那代表部顧問、國務院秘書、陸軍部顧問、國務院印務局參事、奉天瀋陽縣長、北平市政府土地局長、天津市政府土地局長、天津市政府參事等に任ぜられ、王瑞の子なり。

王 家 (植) Wang Chia-chi (Chih-chi) 吉林省懷德縣人。一九一〇年生。慶應大學理財科卒業。歸國後一時吳佩孚の秘書北京政府交通部法律顧問書記官たりしが、吳佩孚失脚後奉天派に投じ大元帥府秘書、外交部秘書、東北邊防軍司令部公署外交處長、主任等に任ぜられ、張學良が國民政府に入ると共に其推薦に依り一九三〇年外交部常務次長に任ぜられ、英國の威海衛返還に際しては外交部特派威海衛接收員として之が接收に當り又重慶回國委員會日本部委員長たり。一九三一年本兼職を辭して歐洲に赴き歸國後外交部顧問、莫德惠の甥なり。

王 家 (烈) Wang Chia-let (Shuei-let) 貴州省遵義縣人。一九一三年生。貴州陸軍軍官學校卒業。曾て袁祖銘に從ひ一九二三年旅長に任ぜられ、周西成貴州省主席たるや前敵總指揮第一師長に任ぜられ、一九二九年毛光翔貴州省主席たるや第二十五軍副軍長兼貴州省政府委員に任ぜられ師長を兼ね、次で貴州、湖南省境方面に出動して湖南軍と協力し共產軍討伐に従事し居たる處、一九三二年毛光翔辭職の後を承けて省政府主席に任ぜられ、一九三五年春まで在任せしが、蔣介石と争ひ蒋介石より武漢行營に召喚され中將參謀となり、北支各省巡邏後一九三六年二月南京陸軍大學に入學し軍

事學を研究す。

王 化 (成) Wang Hwa-cheng (Hsueh-cheng) 江蘇省丹徒縣人。一九一〇年生。美國シカゴ大學哲學博士。歸國後北平國立清華大學政治學教授、國立北京大學法律系講師。

王 漢 (伯) Wang Han (Pao) 江蘇省溧水縣人。一九一〇年生。國立中央大學文學系副教授。

王 穆 (穆) Wang Mu (Wang Mu) 曾て國民政府文官處參事たり。晉縣人。一八八六年生。天津武備學堂卒業後前清衛軍統領軍士成の部下となり日清戰爭に参加す。軍士成戦死後袁世凱に用ひられ一九〇七年任東三省總督(徐世昌)高參副官。一九〇九年任直隸通永鎮守使。一九一一年任多倫諾爾鎮守使。同年任直隸鎮守使。一九一六年袁の死後一時隱退したるも一九一八年徐世昌大總統たるに及び再び出でて其高等顧問に任じ次で一九一九年歩軍統領となる。一九二〇年安直戰後京畿衛戍司令、第十三師長及一九二三年發軍司令代理を兼任す。同年第一次奉直戰に功あり後熱河都統、熱河巡閱使兼京畿衛戍司令に任ぜられ陸軍上將に昇進し一九三三年靖武上將軍に封ぜらる。一九二四年熱河都統を辭し同年第二奉直戰に際して討逆第二路軍司令として熱河方面に出動せるも負傷の爲北京に歸還せる處馮玉祥のクイターに際し身を以て天津に逃る。一九二六年馮玉祥の國民軍討伐の爲張作霖、吳佩孚の合作成るや再び京畿衛戍司令に就任せるも、幾何も無くして辭し爾來閑居す。

王 穆 (漢) Wang Han-shan (Hsueh-shan) 江蘇省蘇州人。一八九〇年生。一九一〇年天津工學院、一九二二年上海工學院化學科卒業。一九一三年漢陽工廠實驗局の化學研究技師。一九一四年軍政署より海外に派遣されて埃太利に赴き銅の研究を、更に瑞典の製鋼所に銅の武

器製品研究をなす。歸國後漢陽工廠に勤務。一九一九年吳淞に紡織機械工場を設立し上海に機械工場を設立。一九三三年漢陽兵工廠の鋼部、機械部技師として勤務。更に兵器學の教官として一九二八年まで在任。一九二九年上海に歸り著述に従事す。電氣による銅の製法其他銅に関する著作多し。軍政部顧問技師たり。

王 穆 (明) Wang Mu (Ming) 山西省新絳縣人。民國西北大學卒業。國民政府內政部參事、太原綏靖公署軍法處長に任ぜられ、陸軍軍官學校、北京陸軍大學卒業。早くより韓復榘軍に在りて曹錕林軍參謀長、河南省警務廳長たりしが、韓が山東省政府主席たるに及び山東河務局長、濟南市政府公安局長に任ぜられ、一九三四年辭職。

王 穆 (格) Wang Mu (Kuo) ジャワのバタヴィアに生る。福建より關東軍印度に移住實業に従事す。一九三二年華僑會長並にバタヴィア支那總商會會長となる。

王 穆 (勳) Wang Mu (Hsueh) 江蘇省泰興縣人。一八八八年生。獨逸陸軍砲工大學卒業。航空署科長、廳長、所長、校長、參謀本部科長、江北大綱製藥公司及阜餘製藥公司經理、國民政府參謀本部科長等に任ぜられ。

王 穆 (慶) Wang Mu (Ching) 浙江省海鹽縣人。一八八二年生。陸軍部陸軍學堂卒業。督練公所科員、吳淞關司令參謀長、浙軍第二十三團々長、浙江水上警察廳長兼海防司令、鎮海區要港司令、江寧區要港司令等に任ぜられ。

王 穆 (慶) Wang Mu (Ching) 河北省定縣人。一八九四年生。美國ハーヴァード大學工學科卒業。天津北洋大學教授、瀋陽東北大學工學院電工系主任教授に任ぜられ。

(才)王

二一

(才) 王  
王 冠 軍 Wang Kuan-chun 曾山東省政府委員兼農務廳長  
たりき。  
王 煥 文(新章) Wang Huan-wen (Shin-chang) 河北省人。  
一八九〇年生。米國留學出身。交通部航政司長、京奉鐵路管理局會  
計處副處長、總務處長、稽核局局長兼代理局長、東三省交通委  
員會郵傳處長、四洮鐵路副局長、東省鐵路金庫副處長、中露會議  
秘書等に歴任。  
王 祺 准(君) Wang Chi (Chun-chen) 湖南省長沙縣人。  
一八九一年生。湖南師範學校卒業後一時日本に留學し次で米國に赴  
きカリフォルニア大學を卒業す。湖南大學教員、廣東臨時政府秘書  
程潛の秘書を経て一九二七年任湖北省政府委員兼農工廳長。同年  
任武漢政治分會財政委員會委員。一九二八年任中央黨部訓練部秘書  
一九二九年任湖南省政府委員、省黨務指導委員兼訓練部秘書。一九三  
三年降職。一九三五年任第五期中央執行委員。一九三七年六月病歿。  
王 其 淵 Wang Chi-yuan 曾財政部後援委員會委員たりき。  
王 毅 誠 Wang I-cheng 江蘇省江都縣人。一八九六年生。  
中華青年會、全國協會體育專科を卒業。在學時、中國全白籃球隊に  
加入し全上海に於て優勝。長沙、南京、上海中華青年會體育專科或  
は主席、國立中央大學體育教員、財政部關稅署稅務專科海關科體育  
教授となる。體育に関する著書多し。  
王 季 五 女 王 Wang Chi-yu 江蘇省蘇州人。女流教育家。日本  
に學び次で一九一七年イノイ大學卒業。更にロムビア大學師範  
部、シカゴ大學等に學ぶ。歸國後蘇州女學校を創立しその校長とな  
る。更に南京女子師範學校校長。一九二五年ホルルにて開催の太平  
洋各國學校第一回大會に委員として出席す。總華女學校校長たる外各  
種教育機關の役員たり。

變に依り辭職。一九二九年來北京に在り。  
王 去 病 Wang Chu-ping 考試院考選委員會秘書。  
王 鍾 襄(明生) Wang Chung-huan (Ming-sheng) 奉天省北鎮  
縣人。一八八二年生。一九二〇年以來東三省官地測量局及市廳局坐  
辦兼水利局總辦、奉天省政務廳長、瀋海鐵路總辦兼東三省交通委員  
會委員、官地測量局總辦等に歴任し滿洲事變前外交部駐遼東特派  
員兼遼寧省政府委員たる外實業界に關係し數百萬の富を擁して奉天  
官界並に實業界に重きをなしたり。  
王 鍾 清 Wang Chung-ching 湖北省安陸縣人。一九〇四年  
生。武昌湖北省立農商學校、湖南省岳州基督教學校に學ぶ。一九二  
五年湖北岳州中學教員、一九二七年南京中央訓練學校に入り一九  
二八年卒業後湖北省黨部幹部として公安部に任命さる。後武漢日  
報の編輯長たりき。  
王 鍾 謙(聖楚) Wang Chung-chen (Sheng-chu) 浙江省黃巖  
縣人。一八九九年生。獨逸に留學し地質學を研究し博士學位を有す  
兩廣地質調查所副所長、國立中央研究院地質研究所專任研究  
員、國立武漢大學地質學教授等に歴任。  
王 鍾 王 Wang Yiao 浙江省奉化縣人。一八八一年生。日本  
東京法律學校卒業。歸國後杭州に浙江法政學院を設立、後浙江第一  
中學校長、浙江教育會々長。江蘇省各地縣知事に歴任。饑饉救濟局  
長、淮河治水委員會秘書長等に歴任。  
王 鍾 嶺(孝純) Wang Hsiao-ling (Hsiao-ling) 浙江省紹興  
縣人。一八八九年生。父業の「大來絲號」を繼承。全國推廣特稅局  
長、財政部推廣稅處副處長等に歴任。後國民革命軍上海占領後上海  
市商會成立とともに主席、一九三四年まで在任。現に市商會執委、  
地方協會、航空協會等の理事、公共租界納稅華人會主席委員、晨報

王 季 鍾 鍾(君) Wang Chi-chung (Chun-chung) 江蘇省吳縣人。  
一八八一年生。日本に留學す。曾國立北京大學工科教授、國立北  
平大學工學院教授に歴任。  
王 季 麟 鼎(希) Wang Chi-lin (Chin-shi) 江蘇省吳縣人。  
一八八〇年生。日本東京高等工業學校卒業。内閣中書、農工商部主  
事、工務司專工科一等科員、庶務廳局長、京師大學堂提調、漢  
治萍公司監督、工部局總辦司金事、農商部郵政局技正等に歴任。  
王 季 同(小徐) Wang Chi-tung (Hsiao-hsu) 江蘇省吳縣人。  
一八七四年生。英國に留學す。鎮江大照電氣公司及吳淞中國鐵工廠  
主任及顧問工程師、國立中央研究院工程研究所專任研究員に歴任。  
王 季 范 Wang Chi-fan 湖南省湘鄉縣人。一八八六年生。  
一九一一年湖南優級師範學校出身、一九二七年秋及一九二八年一月  
次々私立衡粹女子職業學校校長、長郡縣立中學校校長となる。湖南に於  
ける教育界の元老にして、共產黨首領手澤東は湖南師範學校在學當  
時同人の教へたり。  
王 季 文(乃昌) Wang Chi-wen (Nai-chang) 廣西省桂林  
縣人。一八八五年生。廣西師範學校卒業。廣西臨時省議會議員、衆  
議院議員、國民革命第四集團軍總司令部顧問等に歴任。著書「中國  
國民黨革命理論之研究」。  
王 九 齡(竹村) Wang Chi-ling (Chun-ling) 雲南省雲龍縣  
人。一八八二年生。日本法政大學卒業。曾唐繼堯の阿片事件に其  
責を負ひ上海に於て投獄せられたことあり。爾來唐の信任厚く其  
權機に參與せり。雲南陸軍軍法科長、雲南財政司長等に歴任。一九  
二四年雲南代表として北京に赴き日本視察後一九二五年段祺瑞臨時  
攝政内閣に唐繼堯との聯絡の爲教育總長に任ぜられたるも固辭して  
就任せず。一九二七年雲南に歸り雲南省務委員兼縣運使たりしも政

(オ) 王

陸軍第四十七師副師長、第四十七師長、討伐軍第九軍々長、討伐軍第十四路總指揮、湘鄂邊區剿共清鄉督辦等に歴任。現に第五路軍總指揮たり。

王金(鑑) Wang Chin-kin (Chang-kin, Mr. Jick G. Wong) 廣東省台山縣人。一八八八年生。米國ミシガン大學に於て土木工學を専攻す。米支技術者協會會長。一九一三年以來川漢鐵路局技師、直隸治河委員會技師、京綏鐵路局技師、膠濟鐵路局評價委員會委員、膠濟鐵路局技師等に歴任し一九二七年辭して青島に於て土木建築業に従事す。一九二八年一時國民政府鐵道部技正たりしことあり。

王金(相傳) Wang Chin-fa (Chang-po) 河北省豐潤縣人。一八八四年生。國立北京高等師範學校卒業。長安國立西北大學教授、國立北平師範大學地理學系及國立北京女子師範大學講師に歴任。現在北平中法大學、東北大學、及朝陽學院講師たり。著書『中國分省地誌』、『西北之地與人文』、『現代外蒙之概觀』、『中國經濟地理』、『西北地理』。

王(勳) Wang Hsun (Kuo-shan) 廣東省人。一八七二年生。香港皇仁學院卒業後天津北洋大學講師たりしが一八九六年天津中國機械礦山會社代理人となり次いで一九〇三年任粵漢鐵路局長一九〇五年任滬寧鐵路局長。一九一八年任漢冶萍鐵礦公司商業部理事。同年任漢口揚子江機械工場商業部理事。其の後上海中華鐵鋼公司總支配人となる。

王君(秀) Wang Chin-shu 福建省閩侯縣人。一八七六年生。道清鐵路總局文案、海軍司令部秘書、海軍司令部秘書長、海軍上海要港司令部秘書、廈門海關監督門運等に歴任。

王(敬) Wang Ching (Ching-ho) 河北省新縣縣人。

二四

一八八八年生。前清時代直隸優級師範學堂、國立北京法政專門學校法律本科、司法講習所等を卒業。第一次文官試験に合格、京師地方審判廳々長、奉天營口地方審判廳々長、山西太原地方審判廳々長、太原高等審判廳々長、綏遠審判廳々長、政務廳々長、遼寧地方法院院長、察哈爾高等法院々長兼首席檢察官、北平地方法院々長兼主席推事に歴任。

王景(岐) Wang Ching-chi (Shih-shan) 福建省閩侯縣人。一八八四年生。佛國巴黎政治學校、白耳義ルヴァン大學(ドクター・オヴ・ポリテイカル・エンド・ソシヤル・サイエンス)卒業。北京民國政府外交部に入り一九一四年露支蒙古會議書記長たり。一九一六年任國立北京大學教授。一九一八年任巴里平和會議支那國全權顧問。一九二一年任外交部參事。同年駐波斯公使となり次で駐白耳義公使に轉じ國際聯盟支那國全權其他各種會議の支那代表に歴任す。一九二〇年の獨支通商條約及一九二七年の白支通商條約の締結に當る。一九三〇年陸軍外交部條約改訂委員會委員たりしが一九三〇年任上海國立勞動大學校長、中華拒毒會主席。一九三二年外交部條約委員會副會長。一九三六年任駐瑞典・諾威公使。著書『La Voie de la Chine', 'En la France', 其他。

王景(春) Wang Ching-chun (Chao-shan) 河北省漢縣人。一八八二年生。北京通文大學、米國オハイオ大學、エール大學イリノイ大學(ドクター・オヴ・フィロソフィ)等に於て土木工學、鐵道管理學及政治經濟を學ぶ。一九一二年任南京臨時政府外交部參事。同年任京奉鐵路理事。一九一三年任京漢鐵路理事。其後ハストンに於ける第五回國際商業會議支那代表、鐵道會計統計統一委員會副委員長を経て一九一五年任鐵道財政會計局長兼交通部郵政司長代理。一九一六年任交通部顧問。一九一七年任第五回支關稅會

に勤務す。

王繼(藩) Wang Chien-fan (Chun-fan) 河北省清苑縣人。一八七六年生。東京高等師範學校卒業。一九二一年任北京師範學校校長。一九二四年任察哈爾特別區教育、政治兩委員會委員。一九二八年任北京警察官學校校長。同年任國民政府禁煙委員會秘書兼總務司長。一九三〇年任考試院銓敘部主事秘書。その後去職。

王敬(儺) Wang Ching-nai 原名何儺、一に靜宜。浙江省定海縣人。一九〇四年生。燕京大學理學士、コロンビア大學卒業後燕大助教、北平女子大教授たりしがその後求知中學を創立して校長兼教務長となり經營十數年。クリスチヤンにて女青年會職員、婦女會々長に推さる。

王敬(久) Wang Ching-ku (Chun-ku) 江蘇省人。一九〇一年生。一九二三年蘇州中學、一九二四年黃埔軍官學校卒業。革命軍第三師第二十一旅旅長を経て一九三〇年第八十七師第九團長一九三一年同第四團長となり江蘇、浙江、廣東等の革命討伐軍に従事す。一九三四年任第八十七師長。

王(啓) Wang Chi-chang 河北省東鹿縣人。一九〇三年生。獨逸留學出身。國民革命軍總司令部秘書處第三科々長、中央通訊社々長、中國々民黨駐佛支部黨務指導委員、國立中央大學經濟科教授、外交部參事兼中國々民黨中央執行委員會秘書處秘書(一九三三年)等に歴任。

王敬(芳) Wang Ching-fang (Feng-shan) 河南省繁陽縣人。一八七七年生。日本留學出身。衆議院議員、河南宣慰使、吳淞中國公學校校長等に歴任。

王敬(慶) Wang Ching-ki (Chun-ki) 浙江省黃巖縣人。一八八五年生。英國パーミンガム大學卒業。國立北京大學法科講師

(カ) 王

二五

議委員。同年任京漢鐵路局長。同年任京漢鐵路局長。一九一九年任巴里平和會議專門委員。一九二〇年任東支及西北路綫鐵道技術部管理局支那代表。同年任東省鐵路公司理事。同年任交通部技師長。一九二二年任東省鐵路督辦。一九二五年任國際電信聯盟會代表。其後支那損害賠償委員會委員、交通部專門顧問、郵政總局長を経て一九二七年任華商國際無線電信會議總代表。其他主として鐵道、郵政關係の職務に歴任。

王啓(常) Wang Chi-chang (Mr. C. Z. Wang) 浙江省寧波人。一八八八年生。上海聖約翰大學、英國倫敦大學卒業。一九一二年任南京臨時政府財政部員。同年北京政府財政部會計檢査局副局長及財政部書記長となり財政關係各種委員會の委員を兼ね。一九一五年國立北京大學經濟史教授たりしが一九一七年幣制局設置せらるるや同局に入り一九一九年歐洲大戦後の歐米各國に於ける貨幣狀態觀察の爲外遊し同時に中華聯合貿易會社駐歐代理人たり。一九二〇年歸國後再び財政部に入りたるも間もなく辭し一九二二年北京に中華商人商會貯蓄銀行を設立し其總支配人となる。

王繼(實) Wang Chi-shang (Shih-shan) 福建省閩侯縣人。一八八〇年生。一九〇二年上海南洋大學卒業後駐佛公使館留學生及商務官補として巴里に赴き在佛七年巴里高等商業學校、巴里政治大學を卒業す。一九〇八年コペンハーゲンに於ける東洋文學國際會議支那代表たり。一九〇九年歸國後張之洞の秘書となり其後在佛支那留學生監督に任ぜられて再び渡佛し各種國際會議に支那代表として参加す。民國成立後歸國して外交部主事となり累進して政務司長兼管理特殊財產事務局評議員たりしが一九一九年駐墨西哥使務局公使に任ぜらる。一九二四年任孫寶琦內閣國務院秘書長。一九二六年任安國軍外交討論會委員。一九三一年より英米煙草會社北平支行



(オ) 王

天津華義銀行協理兼會計主任、北京通易信託公司副經理、中央銀行監事、國立中央研究院會計處主任等に歴任。

王 勳 (名光祖) Wang Chien-wei (Kuang-chu) 安徽省英山縣人。一八七九年生。字を以て行はる。前清舉人。京師法政學堂卒業。内閣中書、次で民政部員外郎、京師外城西分府文案兼發審委員、工部局秘書官、工部局總辦、京師地方檢察廳檢察官、京師地方初級各級廳署、禁烟公所秘書、地方自治研究所秘書、京師總衛生處科長、京師防疫局文案兼總辦、內城戒捕局秘書、內城巡警總衛生處總辦等に歴任。民國後大理院書記官、記録科主任兼文官高等懲戒委員會事務長等となりしが現在北平に於て歸隱を圖る。

王 桂 (清泉) Wang Kuei-chin (Ching-chuan) 河北省天津縣人。一八八三年生。保定法政學堂、北洋高等警務學堂卒業。天津巡警第一分局長、山海關、天津東區各警察署長。民國後南京警察廳長、江蘇全省警務處長、南京市政廳總長、防疫局長等に歴任。一九二四年北支に歸り張作霖の顧問、國民革命軍第二集團軍參謀たりしことあり。陸軍中將。

王 桂 (悅山) Wang Kuei-shan (Yue-shan) 浙江省東陽縣人。一八八七年生。北洋陸軍軍官學校卒業。浙江鎮江司令官、憲兵學校研究所長、浙江陸軍第六師步兵第十一旅長、浙江嘉湖鎮守使等に歴任。

王 桂 (雲鶴) Wang Kuei-shan (Yun-ho) 江蘇省人。一九〇一年生。復旦大學政治學系卒業。考試院編譯局主任秘書、考選委員會聘任編纂、南昌武昌軍閥の軍事委員會委員、行政訓導處編纂股長に歴任。現在軍事委員會政治訓導處編纂股長兼國民大會軍隊代表選舉事務所所長、著書『近代國家觀念』、『各國地方自治大綱』

二六

『現代探偵の秘密』

王 震 (鑑光) Wang Hsien (Chien-kuei) 山西省寧武縣人。一八八四年生。倫敦大學探偵科卒業。山西警察公署秘書、平奉鐵路管理局局長を擡て一九一七年九月山西大學教授となり、後同校工學院長及冶金系主任を兼任。

王 甄 (陶民) Wang Chien (Tao-min) 江蘇省高郵縣人。一八七三年生。現代支那名畫家の一人。寫作家なるを以て其作品は致重せらる。

王 養 (雲閣) Wang Chien-kan (Yun-ko) 江蘇省上海人。一八八二年生。英國エジンバラ大學文學士、理學士たり。商部高等實業學堂教員、更に大員隨員となりて海外の政治を觀察し天津滄縣總辦、南京警察分署長、天津警察總廳化驗科長、審計院總辦、財政部印刷局總辦、國立北京大學理科講師等に歴任。植物物理、化學に關する著書あり。

王 健 (晉生) Wang Chien (Chin-sheng, Mr. John Wang) 山西省太谷縣人。一八九八年生。上海聖約翰大學、天津工業專門學校卒業後團匪偵査に依る留學生の選拔試験に合格し米國に留學しウィスコンシン大學、ロムビア大學等に於て化學殊に皮革化學を專攻す。歸國後天津に於て皮革工場(華北製革公司)を經營し現在に至る。

王 健 (長信) Wang Chien-shan (Chang-shen) 廣東省番禺縣人。一八八一年生。香港聖仁醫院、天津北洋大學卒業後日本に留學し次で米國に赴きカリフォルニア大學を卒業す。兩廣總督署文案庫支部秘書、江蘇省財政廳秘書、北京大學法科學長、司法部秘書等に歴任。

王 建 (中樹) Wang Chien-chung (Shu-chung) 河北省永

清縣人。一八八二年生。京師大學堂醫學部卒業。北洋法政學堂山東高等學堂法文教員となる。一九一二年山東革命に参加し、次で直隸臨時省議會議員及第一次同議會議長たり。一九一三年十八省會議が上海にて開會するも全國省議會聯合會正會長に選舉さる。第二次革命失敗後捕へらるる三回にして死刑を宣告さるること二回なるも幸に免がれ、一九一七年河北省治水工事をなし大なる功績を擧ぐ。その後商界に投じ京兆商會聯合會々々長、及河北省商會聯合會常務委員、全國商會聯合會執行委員、一九二四年京兆財政廳長、その後野に在り。河北省商會聯合會常務委員、著書『安福禍國記』、『二十世紀外交新史』等。

王 謙 (尊光) Wang Chien (Tsun-kang) 山西省大同縣人。一八九五年生。山西法政專門學校卒業。山西省總司令部政務組長たること多年、一九三一年綏遠省政府秘書長たりしが同年匪徒が山西を迫はるるに及び辭職。

王 獻 唐 Wang Hsien-tang 山東省日照縣人。一九〇一年生。青島高等學堂出身。山東省立圖書館長。國學金石學の素養優秀にして詩文、書畫に長けり。

王 劍 鳴 Wang Chien-ming 四川省華陽縣人。前成都官辦學校卒業。成都總商會主席。

王 元 亨 Wang Yuan-heng 新進作家。一九三六年三月『文藝叢報』を馬子華等と刊行、同六月『中國文藝工作者』同人となる。

王 元 增 Wang Yuan-seng 現に司法部監獄司長たり。

王 國 鑄 (靜庵) Wang Ku-pan (Ching-an) 河北省天津人。一八八〇年生。天津北洋警務學堂卒業後獨逸柏林警察學校に留學、一九〇九年歸國後津浦鐵路警務長を擡出に各地の警察官署に勤務、一九二三年米國に於ける萬國警察大會に中國代表として出席、一九

三四年廈門特種公安局長。一九三五年任首縣警察廳長。

王 璣 (鏡湖) Wang Hui (Ting-hu) 河北省定縣人。一八六七年生。前清進士。四川、廣西兩省知縣、廣東廉欽道、陸軍第二十九混成協統、吉林東北路兵備道、湖南民政長、憲政廳政務、京兆尹、江蘇省長、山東省長、包圍鐵路督辦、黃河水利委員會副委員長等に歴任。

王 光 華 Wang Kuang-hua 香港人。香港星仁學院卒業後香港及上海に於て造船學を實習す。一九〇七年漢口に赴き揚子江機械工場を創設し後 Sui-fang 會社及相互貿易會社を配入。

王 光 宇 (子軒) Wang Kuang-yu (Tzu-huan) 江西省永新縣人。一八八二年生。米國オベリン大學、シカゴ大學理科卒業。湖南私立湘雅醫科大學解剖學講師、湘雅醫院外科主任醫師、湖南仁術醫院々々長、江西省立醫學專門學校々々長兼公共衛生學教授、漢口市衛生局々々長、國民革命軍第四集團總司令部少將軍醫局長に歴任。現に私立湘雅醫院々々長兼湘雅醫院々々長、湖南省政府衛生顧問。

王 光 顯 Wang Kuang-hsien 福建省晉江縣人。一九〇一年生。上海光華大學文學士。在學當時より科學哲學思想史に特別に興味を持ち、現在歷史哲學及一般社會科學史を研究。譯書『科學史』、『科學と近代世界』。

二七

王 廣 (紹輝) Wang Kuang (Shao-hui) 江蘇省無錫縣人。一八九五年生。北京清華大學、米國シガン大學、ロムビア大學、プリンストン大學卒業後支那政府留學生として一九一八年ウェスト・ポイント陸軍大學に入り同校を卒業す。同年歸國陸軍部に勤務。一九一九年任巴里平和會議支那代表部員。一九二三年任北京政府交通部鐵路軍運司令。一九二五年孫傳芳五省聯軍總司令に就任するや其顧問となり次で一九二六年唐生智の幕下に屬す。其後將領浙江

(オ) 王  
軍務後援事業公署高級參謀、國軍編遣委員會編組部設計處副處長等を経て一九三〇年任准北總務秘書局長。  
王 向 榮(向榮) Wang Hsiang-jung (Chiao-jung) 河北省涿縣人。一八八九年生。曾て馮玉祥の幕下に在り。後復讐軍軍需處長、河南省政府財政廳長たりしが、韓が山東省政府主席たるに及び任山東省政府委員兼財政廳長。  
王 夢 英(夢英) Wang Meng-ying 福建省閩侯縣人。一九〇一年生。國立北京女子高等師範學校卒業。福建省立女子師範學校長たりしが一九二七年支那に於て最初の婦人文官として、福建省南縣長に任命せられたるも同地方に土匪多く遂に赴任不能に終る。その後は上海務本女子中學校長として専心女子教育事業に従事すると共に婦女解放運動に活躍す。  
王 夢 綏(夢綏) Wang Meng-sui 福建省閩侯縣人。一八七八年生。福建東文學堂卒業。日本學務視察委員、福建學務公所普通科長、女子師範學堂副理、福建教育司參事官、福建內務司教育科長、教育部視學、福建教育廳長等に歴任。  
王 夢 綱(夢綱) Wang Meng-kuang (Yung-kuang) 福建省人。日本陸軍大學出身。國民政府參事。  
王 廣 圻(廣圻) Wang Kuang-ki (Chia-ki) 江蘇省南匯縣人。一八七六年生。上海東方官報卒業後米國に留學す。前清政府外交部員外郎たりしが陸徵祥和蘭公使として赴任するに際し之に従ひ歸國後外交部參事に任ぜらる。民國に入り一九二二年陸徵祥國務總理代理たるに及び國務院秘書長に就任。次で同年任駐白耳義公使。一九一五年任駐伊太利公使。一九一七年再び白耳義公使。一九二〇年任駐和蘭公使。一九二五年任國聯聯盟支那代表。一九二七年辭任歸國後一九二九年任外交部顧問。一九三〇年任內政部總務司長。

在籍支那人學生及商人に依りて組織せらるゝ支那愛國會を代表して巴里に赴く。一九一九年歸國後上海ジャーナル・オブ・コマーシス社員、申報社副社長、北京デリー・ニュース編輯長兼『申報』北京通信員たりしが一九二二年ホルルに於ける萬國新聞會議に出席し同地より華府に赴き華府會議に參與す。一九二二年歸國後一時北京政府交通部總務局長たり。  
王 國 光(國軒) Wang Kuo-kuang (Huei-kuang) 湖南省資陽縣人。一八七二年生。一九〇六年漢口『中西報』編輯以來社長たり。  
王 國 秀(國秀) Wang Kuo-shiu 江蘇省人、米國コロムビア大學卒業(哲學博士)。南京金陵女子大學史學系主任、上海復旦大學史學系主任に歴任。  
王 克 仁(鏡如) Wang Ke-jen (Ching-ju) 貴州省貴陽縣人。一八九五年生。米國シカゴ大學卒業。國立成都高等師範學校教務長、無錫中學校長、國民黨中央黨部訓練部黨義教育科主任、留日學生監督等に歴任。著書『黨化教育概論』等。  
王 克 鋒(叔魯) Wang Ke-feng (Shu-lu) 浙江省杭縣人。一八七三年生。前清光緒年間留日支那學生監督となり次で駐日公使館參贊たり。歸國後度支部、外務部に仕仕し又四川總督趙爾巽、直隸總督楊士驤、同陳龍龍の幕僚として外交事務を司る。一九一〇年任直隸交涉使。一九二二年辭して歸國に遊び歸國後中法實業銀行重役中國銀行總裁たり。一九一七年王士珍內閣の財政總長となり中國銀行總裁、鹽務監督兼を兼任す。一九一八年辭職し其冬上海平和會議に北方代表として參加す。其後中法實業銀行總裁、天津保商銀行總理、中國銀行總裁、教育救済基金委員會委員等を經て一九三三年張紹曾內閣の財政總長となり孫寶琦、顧維鈞、顏惠慶各內閣に留任。一九二四年馮玉祥のクーデターに因る直隸派沒落の爲辭職天津に還

(オ) 王

二九

一九三一年任駐波蘭兼チエコ公使。一九三三年任外交部條約委員會副委員長。一九三五年任外交部顧問。  
王 廣 慶(廣慶) Wang Kuang-ying 監察院參事。  
王 鴻 恩(鴻恩) Wang Hung-en 陸軍第二十二混成旅旅長、國民革命軍第二集團軍第三十七軍々長等に歴任。  
王 鴻 年(魯瑞) Wang Hung-nien (Lu-nien) 浙江省永嘉縣人。一八七四年生。湖北武備學堂卒業後日本帝國大學法科卒業更に大學院に入り行政法を専攻し四川武備學堂監督兼四川學務處代理督辦其後外務部主事、一九一五年任駐日公使館一等書記官、參事官、一九一九年任朝鮮總領事、一九二三年任駐廣東共和國外交代表兼チタ總領事事務代行、太平洋會議專門委員、一九二六年任外交部譯文法政學校々長、一九三四年任駐橫濱總領事、一九三六年八月歸國。  
王 宏 實(宏榮) Wang Hung-shin (Chia-shin) 四川省人。日本留學、國立北京法政專門學校教授、四川教育廳長、國民政府考試院編撰、吳淞中國公學總務長等に歴任。  
王 公 瓊(瓊) Wang Kung-cho 最新國民黨機關紙中央日報の編輯部にありたるも一九三四年胡報社を創辦社長となり經營に當る。  
王 國 華(國華) Wang Kuo-hua (Yung-hua) 陝西省榆林縣人。一八九九年生。一九二三年北平清華學校、一九二四年米國コロラド大學經濟科、一九二六年シカゴ大學商學院卒業。歸國後國民政府建設委員會設計委員、會計科長、稽核科長、浙江省建設廳秘書兼稽核委員會主任、浙江省稽核總委員會秘書主任等に歴任。現に鐵道部新設建設委員會秘書主任兼稽核司署署長。  
王 國 鈞(伯衡) Wang Kuo-kuo (Po-hung) Mr. Kou-chun Penn Wang, 江蘇省上海縣人。一八八四年生。北京清華大學、米國プリンストン大學、コロムビア大學卒業。巴里平和會議に際して

(才) 王  
青島特別市政府秘書長、安徽省政府委員兼民政廳長等を経て一九三〇年國民政府監察委員會副委員長となり一九三一年末國民政府改組に際し辭職す。

王 之 幹 Wang Chih-kan 一九二九年京都に於ける第三回太平洋問題調査會に支那代表として出席す。上海其警察青年會幹事、王 之 相(叔梅) Wang Chih-hsiang (Shanghai) 奉天金縣中縣人。天津北洋講學館卒業。在浦潮總領事、外交部秘書、中興康慶委員會秘書、京師大學法政科教授、駐露大使館二等秘書、國立北平大學法政學院法政系主任教授等に歷任す。

政變毎に出處を要請せられたるも固辭して出でざりしが一九二四年段祺瑞臨時執政として出處するに及び此老友を援ぐる爲に出でて軍事善後委員會委員長に就任し奉直聯合軍と國民軍の衝突に際しては平和調停に奔走し京師治安維持會會長となる。一九二六年安國軍軍事最高顧問たりしが一九二八年張作霖北京撤退に際し北京の治安維持を託せられ京師臨時治安維持會會長として治安の維持に盡す。一九三〇年北平に於て病歿す。

王 士 賢(魯民) Wang Shih-ho (Chunshin) 安徽省合肥縣人。國民政府審計院審計總長、國民政府監察院秘書等に歷任す。

王 志 遠 Wang Chih-yuan 現に國民政府僑務委員會秘書處處長たり。

王 士 珍(聘卿) Wang Shih-chen (Ping-ching) 河北省正定縣人。一八六三年生。北洋武備學堂卒業(段祺瑞と同學)。日清戰爭に参加し戰後其世凱が天津小站に新軍を組織するに之に加はり工程營統領となる。袁が山東巡撫に轉任するに之に従ひ參謀處總辦に任ぜらる。次で北洋武備學堂總辦、江北提督、兵部侍郎等に歷任し袁世凱の失脚に殉じて辭職。一九二一年第一革命黨時袁世凱が清室最後の内閣を組織するに陸軍部大臣兼兩湖及兩廣總督に任ぜらる。民國成立するや下野し自清室の遺臣を以て任に固りしも袁世凱再三の懇請に依り一九二五年出でて陸軍部大臣兼兩湖及兩廣總督となる。一九二五年任世凱内閣陸軍總長。一九二六年任段祺瑞内閣參謀總長及陸軍總長。一九二七年張勳の復辟に參預し内閣議政大臣、參謀部大臣に任ぜらる。復辟失敗後段祺瑞内閣に再び陸軍總長となり一九二八年段に代つて國務總理兼陸軍總長に就任す。一九二三年持冠後援威上將軍を授けられ故郷に閑居す。北洋軍閥の元老として爾來

王 志 華 Wang Chih-hua 浙江省嘉善縣人。一八九七年生。米國コロムビア大學卒業。歸國後銀行界に入り一時浙江實業銀行にて銀行事務の見習をなしたる後江蘇農民銀行總管理に就任し其後同銀行の組織を改め新華信託儲蓄銀行と改稱し其總理たり。其傍ら中華職業學校教頭、經濟討論委員會委員、國貨銀行員、國民政府公債保管委員會委員等を兼任す。

王 芝 庭 Wang Chih-tung 陝西省耀縣人。一八八五年生。明治大學法政科卒業。甘肅高等法院長、寧夏高等法院長に歷任す。

王 恩 義(正軒) Wang Sun-i (Chang-tsun) 山東省賀劍縣人。一八九七年生。山東高等軍事訓練所出身。曾つて革命軍第一騎兵師團副長。

王 恩 默 Wang Sun-mo 浙江省人。一八九六年生。佛國里昂大學卒業。北京政府司法部參事。浙江省龍溪縣地方審判廳長等に歷任。一時上海に於て律師士を開業することあり。一九二八年任江蘇高等法院檢察長。一九三五年任上海第一特別區地方法院長。王爾思の親戚なり。

王 子 壯 Wang Tzu-chuang 山東省濟南人。一九三五年任

國民黨第五期中央監察委員會委員。一九三六年任考試院登錄部政務次長。

王 治 昌(槐亭) Wang Chih-chang (Huai-tung) 河北省天津人。一八七七年生。日本早稻田大學商學士。農工商部七品小京官。工商部商務司參事。代理商務司長。農商部參事、參事、司長、華盛頓會議中國代表團專門委員、農商銀行監理官、公使等に歷任。

王 師 復 Wang Shih-fu 福建省閩縣人。一九一一年生。福建省廈門大學法學士。福州新福建日報社編輯主任、中國文化建設協會福建分會研究班經濟講師、上海海關外班工務員、海軍編譯處編輯員等に歷任。著書『論中國國防』、『羅馬文化』。

王 治 心 Wang Chih-hsin 浙江省人。一八八一年生。清朝時代各種學校の教鞭を取る。一九二一八年中國英學雜誌の編輯を司る。一九二二年南京學校にて中國哲學の教授。一九二六、二八年其著書『文學協會』の編輯長。一九二八、三四年福建基督教大學の美術科長。一九三四年以來滬江大學支那人部長に就任。著書『中國歷史上之神觀念』、『中國文學上三民主義』等。

王 時 雨(雨民) Wang Shih-yun (Yun-min) 湖南省永順縣人。一八八八年生。保定陸軍軍官學校卒業。北伐以來將介石に従ひ各地に轉戰す。一九二八年軍政部參事。軍事に關し數種の著書あり。

王 治 衡(鶴聲) Wang Chih-hung (Hsueh-sheng) 湖北省黃陂縣人。一八九一年生。佛國巴黎大學法學博士。國立北平大學法政學院教授、北平中國大學政治系主任、朝陽大學及外交部、露文法政專門學校教授、國際聯合會秘書、外交部秘書、東北大學法政學院法律系教授等に歷任。著書『國際勞工機關概要』。

王 時 養(敬汝) Wang Shih-yang (Ching-tsu) 江西省九江人。一八九一年生。兩江師範農科、中國公學法律科卒業。在學時代同學生と文藝團體を組織す。江西省立第三師範、第六師範、女子師範、第四中學專任教員主任、校長、南昌地方檢察廳檢察官、九江市府秘書長、陸海空軍總司令行營黨政委員會秘書、江西省教育廳秘書、江西全省編譯處主任に歷任。現に九江警備司令部秘書兼陸軍第三十六軍司令部秘書。近著書『現代普通尺牘大全』。

王 治 平(化甫) Wang Chih-ping (Hua-ping) 北京人。一八七九年生。北京清文大學、米國シラキニス大學卒業(哲學博士)。一九一七年歸國後清文大學政治史教授となり次で一九一九年天津基督教青年會幹事、一九二六年北京『青年』教員牧師等たりしが一九二八年北支那年大會を代表して米國カンサス市に於けるメソヂスト派總年大會に出席す。一九三〇年歸國後支那人最初の東亞細亞中央年大會所屬教會監督に任ぜらる。

王 時 新 Wang Shih-shin 浙江省甯波人。一九〇二年生。上海泰西豆麥行に入りしが後、鎮江に哈成麵粉股份有限公司を設立しその董事兼總經理となる。其他民新輪船公司、南陽昌麵粉公司等を設立しその經營に任ず。上海に於ける少壯實業家として將來を囑望す。

王 治 平(化甫) Wang Chih-ping (Hua-ping) 北京人。一八七九年生。北京清文大學、米國シラキニス大學卒業(哲學博士)。一九一七年歸國後清文大學政治史教授となり次で一九一九年天津基督教青年會幹事、一九二六年北京『青年』教員牧師等たりしが一九二八年北支那年大會を代表して米國カンサス市に於けるメソヂスト派總年大會に出席す。一九三〇年歸國後支那人最初の東亞細亞中央年大會所屬教會監督に任ぜらる。

王 時 瀛 Wang Shih-ying 湖南省長沙人。一八八〇年生。日本海軍兵學校第三期卒業。一九〇五年江防艦隊參謀に任じ後第三艦隊駐京辦事處長と爲り一九三三年任青島公安局長。

王 次 甫 Wang Tsi-fu 河北省政府秘書長、國民政府文官處參事に歷任。現に江西省政府委員兼民政廳長たり。

王 治 昌 Wang Chih-chang 曾て漢口市政府教育局々長たり。

王 明 昌 Wang Ming-chang 山西陸軍第二旅々長、國民政府軍事參議院參議に歷任。

(才) 王

三〇



(才) 王

王 式 (通稱) Wang Shi-tung (Shu-tung) 山西省汾陽縣人。前清進士。京師通志學堂畢業。一九〇六年前清學部より學務觀察委員として日本に派遣せらる。歸國後内閣中書、大理院推事、御史、大理院少卿等たりしが民國成立後司法次長、約法會議秘書長、政治會議秘書長、政事堂秘書長等に歴任す。一九一六年任國務院秘書長。一九一七年任全國水利局副局長。一九一九年任國務院參議。一九二五年任清史館纂修、禮部館纂修、東方文化事業委員會委員、史地學者。一九三二年歿。

王 執 (中模山) Wang Chih-chung (Ma-shan) 安徽省六安縣人。一八七六年生。京師高等巡警學堂畢業。旅京皖省中學堂教員、發校學生監、四城巡警總隊行政科員、巡警教練所教員、教務院管理員、候補七品官、一等科員等に歴任。民國後警察制度改組するや一等警佐となる。其後市政維持會幹事、市政公債會々員、外左二區警察署長、警正、京師警察廳行政處第三科々長、警察廳戶籍科員、北平市公安局第一科長等に歴任。

王 錫 (湘泉) Wang Hsiung (Hsiung-shuan) 浙江省杭州縣人。一八七一年生。杭州總商會長、杭州興業銀行董事長、市商會執委に歴任。

王 錫昌 Wang Hsi-chang 福建省人。一八九二年生。北京清華大學卒業後渡米しマサチューセッツ技師學院、ハバナ大學、コロムビア大學を卒業す。一九二二年陸軍後清華大學講師、東支鐵路技師たりしが一九二六年北支鐵路技師に就任し、同社總支配人となり一九二七年北支鐵路合同總支配人に就任す。一九三〇年中國航空公司組織せらるるや同公司總務局長となり、同公司の組織變更事務長兼秘書となり米支航空協約委員會委員を兼ね、著書 "Growth in Iron and Steel"

三二

王 錫文 (毅) Wang Hsi-wen (Ying) 四川省內江縣人。一八八二年生。前清秀才の出しして日本山口商學卒業。財政部倉庫科長、漢口金城銀行經理、漢口銀行公會主席に歴任。現任天津金城銀行經理。

王 錫綸 Wang Hsi-lun 江蘇省無錫人。一九〇六年生。北京通才商業專門學校、日本飛行學校、米國航空學院卒業。現に上海市公用局科員、航委會の「航空雜誌」に特別關係をもつ。編譯『青年陸軍常識』、『青年海軍常識』、『青年軍事航空常識』、『近代世界航路史略』、『航路の政治經濟』、『航空常識』。

王 若 偉 (寅青) Wang Jo-wei (Sao-ching) 江蘇省溧陽縣人。一八九六年生。上海同濟大學電工機械專科卒業。文官高等考試合格、西北邊境使署委員兼北京大學講師、交通部員採用試驗合格、留學英國、交通部考工科辦事、露支口讓諮議、交通部秘書、大元帥府諮議、奉天兵工廠技師兼兵工廠校教育長、陝西省公路局長、西安綏靖公署參議兼歐亞航空公司主任、河南電政管理局々長を経て現任天津電報總局長。

王 成 (志) Wang Shou-cheng (Chih-chia) 江蘇省吳縣人。一八九五年生。米國シカゴ大學植物學卒業。上海滬江大學教授、國立中央大學理學院生物學系副教授に歴任。著書「公民生物學」。

王 守 善 (靜虹) Wang Shou-shan (Ching-hung) 江蘇省嘉定縣人。一八八一年生。進士。日大高等工業學校卒業。農工商部主事駐瀋陽總領事、朝鮮總領事等に歴任。一九三六年任代理駐神戶總領事。

王 守 忠 Wang Shou-chung 天津法政學校。

王 綏 (佩卿) Wang Shou (Pei-ching) 山西省沁縣人。一八九九年生。南京金陵大學農學士、米國ミネルバ大學教育科卒業。

(七) 王

米國にて在學時米國榮譽學會員に推薦さる。歸國後中華農學會、中國育種學會、世界遺傳學會等の學術團體に加入す。曾て日本米國各地並國內各省を遊歴す。國民政府農務部設計委員、賑災委員會專門委員、農務委員會特約編輯、金陵大學講師に歴任。現に金陵大學農務系主任兼育種學教授。著書「中國作物育種學」。

王 善 廷 Wang Shou-tung 現に海軍練習艦隊司令兼魚雷游擊艦隊司令たり。

王 善 (裕年) Wang Shou-pao (Chuan-nien) 江蘇省上海人。一九〇二年生。國立同濟大學土木科及漢國工業大學專科卒業。中國工程師學會々員。歐洲各國を遊歴す。長沙興業建築公司技師、浙江省公路局水利局及び安徽省公路局技師及主任技師、杭州之江文理學院土木科教授等に歴任。現に同濟大學工學院教授兼附設高級工業職業學校土木科主任。著書「建築構造學」。

王 樹 (榮三) Wang Shu-jung (Cheng-shan) 浙江省吳興縣人。一八七五年生。前清時代舉人。京師法律專門學堂卒業。江蘇高等審判廳推事、直隸高等審判廳推事、民庭々長、山西高等檢察廳檢察長、江蘇高等檢察廳檢察長、安徽高等法院首席檢察官、國民政府司法行政部科長等に歴任。

王 樹 (幹維由) Wang Shu-kan (Wei-chou) 奉天省瀋陽縣人。一八七四年生。前清時代より奉天官界に在り一九〇八年任軍機製造廠長。一九一〇年任該廠廠長。一九一三年任奉天省南路觀察使。其後奉天、吉林、黑龍江各省の地方官を経て一九一六年任浙江省內務司長。同年任奉天財務廳長。一九二二年任吉林財政廳長兼吉林官廳監理官。同年任吉林政務廳長。一九三三年任吉林將軍秘書長、同高等顧問、吉林省長代理。一九二八年張作霖死後奉天派代表として北京に赴き蔣介石等南京革命軍との妥協交渉に當る。一

三三

九二九年東北政務委員會組織せらるるや同委員となり秘書長を兼任す。一九三〇年任國民政府委員、國民政府文官長(就任せし)。一九三一年張學良陸海軍副司令に就任するや其秘書長に任じ張學良に隨つて北平に赴く。同年末南京政變に伴ひ陸海軍副司令全部廢止せられ北平綏靖公署設置せらるるや同公署秘書長に任じ國民政府委員に擧げらる。一九三三年張學良北平綏靖公署主任を辭任し同公署廢止、後任國民政府軍事委員會分會委員、國民政府委員。

王 樹 (榮庭五) Wang Shu-chang (Ting-wu) 奉天省遼中縣人。一八八五年生。日本陸軍士官學校及陸軍大學卒業。一九一九年歸國後北京參謀本部に勤務し次で奉天第二十七師參謀長を経て一九二一年任黑龍江省督軍公署參謀長兼第二十二旅長。一九二五年任奉天督軍公署參謀長。一九二六年任東三省保安總司令部參謀。同年奉國職に際し吳俊陞軍參謀長たり。一九二七年顧維鈞内閣の陸軍次長となり同年辭して奉天軍第十軍長として國民革命軍と戦ひ奉天軍の關内撤退と共に奉天に歸る。一九二八年任東北邊防軍司令官公署軍令廳長兼黑龍江省政府委員。一九二九年露支紛争に際し東北第二軍長に任ぜられ一九三〇年奉天軍京津進出と共に再び第二軍長として天津に入り次で一九三一年任河北省政府委員兼主席。一九三二年張學良北平綏靖公署主任辭任後任軍事分會委員。一九三五年任軍事參議院副院長。一九三七年任甘肅綏靖主任。

王 樹 廷 Wang Shu-tung 一九三四年任海軍練習艦隊司令。

王 樹 (樹卿) Wang Shu-shan (Chieh-ching) 河北省新城縣人。一八五八年生。前清進士。前清時代四川、甘肅兩省各縣の知縣道尹を経て一九〇六年張之洞の幕下に入り、新編布政使代理となり伊犁武備學堂を創設す。民國成立後衆議院議員、約法會議議員、參政院參政、國史館協修等に歴任し一九二〇年任國史館纂修總纂。一九



(才) 王

や再三奉天に赴き妥協を策したるも遂に成功せず開戦を見るに及び直隸軍路司令として奮闘し戦後直隸省長、陸軍上將に任ぜらる。一九二三年任署理軍務後事宜、直隸豫閩巡閱使。其後關武上將軍を授けられたるも一九二四年第二十三師長其他の兼職を辭し直隸豫閩巡閱使局局長に就任す。一九二八年第二次奉直戰起るや討逆軍司令官兼直隸後方籌備總司令、直隸軍務管理たりしも吳佩孚敗れて直隸派没するや天津に逃れ大連に隠棲す。

王 勛 (少将) Wang Shao-shan (Shao-shan) 河北省天津縣人。一八六七年生。天津北洋水師學堂第一期卒業後北支那最初の留學生として英國に留學し海軍兵學校に學ぶ。歸國後北洋水師學堂教習、北京五城學堂教務長、北洋大學總教習、直隸軍務公所議長、天津議會議長、第一革命後の直隸保安會長、北洋大學監督、直隸選出約法會議議員、參政院參政、北洋大學總長等に歷任し一九一六年開議院協理となれるも病氣の爲一九二七年辭職。

王 綱 (少将) Wang Shao-shan (Shao-shan) 江蘇省上海縣人。一八九〇年生。英國に留學し機械學を専攻す。鐵道技師として湘鄂鐵路總務處總段長、同處長代理、上海交通大學機械工程學院長兼教授等に歷任。

王 綱 (伯武) Wang Shao-shan (Shao-shan) 江蘇省高郵縣人。一九〇五年生。金陵大學文學士。在學時代より歴史の研究に興味を有し卒業時賞を受く。南京國際問題討論會、縣政研究會、歷史學會等の學術團體に加入す。廈門集美中學文史教員、鎮江崇實女子中學國文系主任に歷任。現在は金陵大學歷史系講師たり。著書『歐洲近代史』。

王 綱 (成祖) Wang Sheng-shan (Cheng-shan) 江蘇省上海人。一九〇二年生。米國シカゴ大學地理科、ハーヴァード大學史學

三六

科卒業。國立清華大學及び同門大學教授に歷任。現在上海大夏大學地理學教授兼歷史社會學系主任、國立交通大學管理學院講師たり。著書『地理學』、『復興高級中學教科書本國地理』。

王 綱 (承緒) Wang Sheng-shan (Cheng-shan) 貴州省人。日本陸軍士官學校步兵科卒業。曾て國民政府訓練總監部國民軍教育處長たりき。

王 綱 (季梁) Wang Chin (Chih-liang) 浙江省黃巖縣人。一八八五年生。米國に留學す。湖南高等工業學校教授、國立東南大學化學系主任、浙江公立工業專門學校教務主任兼化學科主任、國立中央大學理學院院長兼化學系副教授、國立中央研究院化學研究所長に歷任。

王 綱 (一亭) Wang Chen (Ching) 號白龍山人。浙江省吳興縣人。一八六六年生。上海大達輪船公司經理、日清汽船會社華人經理、上海粉交交易所理事、國民政府賑務委員會委員、導淮委員會委員、上海昌明醫藥專科學校校長。上海實業界の有力者にして多くの慈善團體、佛教團體に關係すると共に書畫家として有名にして殊に畫は南畫の大家吳昌碩と並び稱せらる。日清汽船會社創立以來の買辦なり。第一革命に際しては上海都督府財政部長に任ぜられ一九二七年國民革命軍上海警備司令部顧問たり。上海實業界の長老にして屢々上海總商會、全國總商會の要職に就けり。一九三六年任救災準備金保管委員會委員長。

王 綱 (東) Wang Ching-shan (Shou-shan) 山東省棲霞縣人。一八九二年生。濟南育英大學卒業。一九二四年任芝罘青年會總幹事。

王 綱 (南) Wang Chen-nan 現に國民政府軍政部陸軍軍法司長たり。

王 綱 (震海) Wang Shen-hsien (Chen) 江蘇省吳縣人。

一八七五年生。前清時代進士。日本法政大學卒業。國史館協修。實錄館協修、郵傳部圖書編輯局編輯、江蘇高等審判廳推事、吳縣地方審判等に歷任。

王 綱 (命) Wang Hsin-shan 福建省福州人。無爲又は飄泊王のペンネームを用ゆ。曾て『新人』を主宰せしが後『上海晨報』に入る。著作小説『狗史』、戯劇『慈母娘』。

王 綱 (林可勝) Wang Hsin-shan (Ko-sheng) 吉林省榆樹縣人。舉人。江蘇巡按使署諮議長、江蘇省蘇甯道尹、吉林政務廳長、外交部特派吉林交涉員、吉林省政府委員兼教育廳長等に歷任。

王 綱 (叔) Wang Jen-shan 筆名趙希、浙江省奉化縣人。文學研究會會員。作品は大抵『小説月報』に掲載。作品には『鑒獄』、『阿貴流浪記』、『在波洛中』、『殉』、『破産』等あり。又『革命文學論文集』を出版『山雨半月刊』を主宰せり。中國文藝家協會會員。

王 綱 (士樞) Wang Jen-shan (Shih-shu) 江蘇省崑山縣人。一八八五年生。米國ハーヴァード大學卒業。北京交通大學教務長、北平國務學校校長兼北京大學數學系主任教授を歷任。

王 綱 (美女士) Wang Jen-shan 本名王細細。湖南省人。一九一三年生。聯華影業公司俳優。『明月歌舞團』のスターより銀幕入りをして聯華公司の名作『漁光曲』に主演し名聲一時にあがる。性格女優にして女優としてあらゆる條件を備へ端麗と並稱さる。一九三四年一月俳優金鐘と結婚。作品『野玫瑰』、『都會的早晨』、『漁光曲』、『小天使』、『西廂記』、『長恨歌』、『壯志凌雲』、『風雲兒女』。

王 綱 (文) Wang Jen-shan (Wen) 雲南省大理縣人。一八七三年生。前清進士。貴州、廣西省等知縣、知府、廣西桂平梧道、廣東按察使、陝西布政使、四川布政使、護理四川總督、川滇邊務大臣、參議院議員等に歷任。

(才) 王

王 綱 (人) Wang Jen-shan 江蘇省泰縣人。米國シカゴ大學經濟學士。上海復旦大學、持志大學教授、國立暨南大學法學院院長兼政治經濟系主任に歷任。

王 綱 (儒) Wang Sheng-shan (Shou-shan) 湖南人。一八六二年生。舉人。湖北財政廳長、湖北督軍署秘書長、西岸航運局長、內務次長、農商次長等に歷任。

王 綱 (植) Wang Chung-shan (Shou-shan) 江蘇省常熟縣人。一八九七年生。米國マサチューセッツ大學卒業。浙江公立工業專門學校及上海交通大學教授、無線電機製造廠訓練部主任、國民政府建設委員會國際無線電台籌備主任、建設委員會無線電管理處副處長及同處長、同委員會電氣標準局長等を經て葛敬恩に從つて一九三〇年任青島市政府工務局長。同年辭職。

王 綱 (女士) Wang Jen-shan 廣東省東莞縣人。一九〇〇年生。當時夫人。米國ニューヨークグランド音楽院卒業。在學時代米國各地に於ける音樂演奏及ピアノ個人演奏に参加す。國立東南大學、上海光華大學及國立暨南大學教授に歷任。現在は國立暨南大學講師となり、上海王瑞珊音樂館を創立す。著書『兒童年歌』。

王 綱 (庭) Wang Jen-shan 河北省天津人。一八九七年生。保定軍官學校卒業。滬滬鐵路司令部附屬機關、上海市公安局督察、江蘇水警廳等に勤務す。一九三三年より實業界に入り福記轉運公司を創立す。尙現に滬滬財政部稅務機關顧問官たり。

王 綱 (棋) Wang Hsin-shan (Chih-shan) 安徽省人。一八八九年生。英國倫敦大學卒業。國立北京大學化學教授、安徽省黨務指導委員、國民政府建設委員會專門委員、國立武漢大學副校長兼理學院長に歷任。次で任國立武漢大學校長。著書『科學方法論』、『科學概論』。

三七

- 王 晴 國(信安) Wang Ching-kuo (Chin-an) 山西省五台縣人。一八九二年生。保定陸軍軍官學校第五期步兵科卒業。以山西軍に在りて累進し一九二六年任國民革命軍第三集團軍師長。一九二八年任中央陸軍第三十七師長。反蔣軍起るや山西第三軍長たりしが一九三〇年閻錫山の失脚と共に山西に退き大任職豫警備司令、第七十師長。一九三三年兼任包西警備司令。閻錫山の女婿なり。
- 王 清 彬 Wang Ching-pin 北平市人。一九〇三年生。國立北京大學經濟學系卒業。在學時經濟會半月刊の編輯主任となる。經濟理論及經濟史を専攻す。北京銀行公會の銀行月刊編輯、中華教育文化基金會社會調查部編輯、安東師範高級中學教員等に歴任。現に中央宣傳部幹事たり。譯著『政治的經濟現狀』、『第一次中國労働年鑑』。
- 王 清 樸(丹援) Wang Ching-mu (Tan-ku) 江蘇省崇明縣人。一八五七年生。進士。湖北按察使、南洋宣慰使、鐵路公司總理、上海南洋公學監督、浙江財政清理員、江蘇財政司長、太湖水利局督辦、導淮委員會委員等に歴任。
- 王 世 瑛(俊樞) Wang Shih-yu (Chin-shao) 河北省天津人。京漢鐵路總段長、粵漢鐵路工程局長、交通部北平鐵道管理學院講師に歴任。
- 王 世 瑤(少遊) Wang Shih-yao (Shao-yu) 浙江省奉化縣人。一九〇八年生。上海美術專科學校卒業。在學時代學生會文書となり、卒業記念編輯主任となる。上海美術專科學校文書主任、圖書館主任、上海博文女子中學國文教員、郵傳部本公學校校長、寧波大報社編輯等々に歴任。現在上海にて家庭教師をなす。著書『藤非子研究』、『文章法淺説』、『西洋畫史略』。
- 王 世 榮(雪樵) Wang Shih-chieh (Shieh-ching) 湖北省崇陽縣人。一八八二年生。天津北洋大學、英國倫敦大學、佛國巴黎大學卒業。國立北京大學憲法教授、同校法學部部長を経て一九二七年任國民政府法制局長。同年轉任湖北省政府委員兼外交處長。一九二八年再び法制局長となり同年常設仲裁裁判所(滙牙)裁判官及國立中央研究院社會科學研究所法制組主任、立法院立法委員等に歴任す。一九二九年任國立武漢大學校長。一九三二年湖北省政府改組に際し委員兼教育廳長に任ぜられたるも教育費不渡の爲時日を出でして辭す。一九三三年任國民政府教育部長。一九三五年任第五期中央執行委員。著書『La Réparation des Compensations dans les Constitutions fédérales』、『A Treatise on Comparative Constitutional Law』、『The Problem of the International Settlement of Shanghai』、『The Legal Aspects of Slavery in the History of China』等。
- 王 世 爵(女士) Wang Shih-ching (Miss Lucy C. Wang) 福建省福州人。一八九九年生。福州華南女子大學に學び次で米國に留學しモニング・サイド大學、ミシガン大學を卒業。一九三三年歸國後廈門大學化學助教及華南女子大學化學教員を経て華南女子大學教務長となる。一九二八年再び渡米しミシガン大學に學ぶ。一九三〇年歸國後華南女子大學校長たり。
- 王 世 勳(調鼎) Wang Shih-hui (Tiao-tu) 安徽省貴池縣人。一九〇二年生。米國華盛頓大學經濟學博士。曾て國民政府工商部商業司經營科々長たり。
- 王 世 復(復樞) Wang Shih-fu (Fu-shu) 福建省閩侯縣人。一八七三年生。上海南洋大學卒業。前清進士。一九〇四年渡英しリンコルン・インに學びバスターの資格を得。一九〇七年以來前清政府郵傳部、海軍部及教育部に出仕し民國成立後袁世凱の秘書となり一九一四年福建省選出約法會議議員たりしが一九一五年袁

- の帝制に反對して秘書を辭す。爾來新聞記者として北京『公言報』記者及北京『テリ・ニュース』編輯長たりしが一九一八年衆議院議員となり參政院參政及交通部顧問を兼ね。一九二二年北京『晨報』社を創設し自ら主筆となる。一九二六年任英米煙草會社顧問辯護士。譯書『中國外交關係史』。
- 王 世 璽(君宜) Wang Shih-chang (Chun-i) 江蘇省吳興縣人。一八八一年生。英國、ハインガム大學經濟科卒業。歸國後湖南省礦務局議員、奉天交涉局議員、學務處調查員、財務課食事、財政部公債司科長、財政討論會々員、銀行籌備處職員、幣制委員會委員、國務院憲法研究會辦事員、外交部外人損失賠償審查會委員、制備局銀行股々長、國庫股々長、幣制局鈔券處副處長、泉幣司第三科々長、泉幣司長、天津造幣廠長、交通銀行員に歴任。
- 王 正 基 Wang Cheng-chi 國民政府考選委員會專門委員。
- 王 正 序 Wang Cheng-shan 浙江省奉化縣人。一八九三年生。エール大學、プリンストン大學卒業。歐洲大戦當時佛國に滞在す。交通銀行シガール支店代理人、和豐銀行交換局長、同銀行副支配人に歴任。現に華僑銀行上海支店支配人たり。王正廷の弟。
- 王 正 心 Wang Cheng-shan 法政大學出身。察哈爾省政府秘書たりしが一九三六年十二月任冀察政務委員會外交委員會駐察哈爾省辦事處主任。
- 王 正 廷(儒堂) Wang Cheng-tung (Chung) 浙江省奉化縣人。一八八一年生。天津北洋大學卒業後日本に留學すること二年にして渡米しシガン大學及エール大學を卒業す。(後年上海聖約翰大學よりドクター・オヴ・ローを授けらる)一九一一年上海中國基督教青年會幹事となる。第一革命勃發するや革命運動に加はり一時袁元洪の下に在り。上海に於ける南北和平會議參贊、湖北軍政府外交部
- 長を経て一九二二年唐紹儀内閣の工商部次長、同總長代理及參政院副議長たり。國會解散後上海に在りしが袁の帝制問題起るや反袁運動に盡力し袁の死後唐紹儀の代表として北京に赴き新國會に再び參政院副議長を勤め國會解散後廣東に赴き廣東非常國會副議長たり。次で一九一八年廣東政府外交代表として渡米。一九一九年巴里平和會議開かるや北京政府より支那全權代表に任ぜられて渡佛し山東還付問題等に關し大いに活躍す。一九二〇年歸國後一時實業界に入り上海に貿易會社及華恒紗廠を創設す。同年北京政府より和約研究會長に任ぜられ北京に赴けるも南北不統一を理由に就任せず。一九二二年山東交渉起るや山東問題善後事宜督辦に任ぜられ山東問題日支聯合委員會支那側全權委員として日本側との交渉に當り汪大燮内閣の外交總長に任ぜられ山東協定に調印す。其後國務總理代理、司法總長代理、教育減價基金委員會委員、露支交涉準備委員たりしが日本關東軍侵襲後の在留支那人の状況視察の爲日本に派遣せらる。歸國後中俄交涉事宜督辦に任ぜられヨッフエ及カラハンと交渉を重ね一九二四年露支條約締結の締結を見んとするや條約署名の資格に付き反對を受け遂に其功を外交總長顧維鈞に奪はる。次で同年馮玉祥クーデターに依り北京の政權を把握するや之に策應して活躍し馮郭の攝政内閣に入りて外交財政總長に任ぜられたるも間もなく辭し一九二五年再び中俄交涉事宜督辦となり五卅事件善後辦理、關稅特別會議全權委員を兼ね關稅特別會議に際しては許世英内閣の外交總長として會議に參與す。一九二六年馮玉祥軍北京を撤退するや辭職して上海に在りしが一九二七年蔣介石の聯席者として馮玉祥の許に赴き開封に在りて臨海鐵路督辦、外交委員會委員たり。一九二八年濟南事件後黃郛の後任として國民政府外交部長に就任。國民政府委員、國民黨中央執行委員、其他政府及黨の機構に參與し所謂革命外

(オ) 王

交の進展に努めて活動せる。一九三二年滿洲事變後外交部に於て執務中を政府の外交政策に不満を抱ける學生群の爲めに重傷を負ひ外交部長を辭す。爾來上海に在りしが南京、廣東、安撫成立後一九三二年任中央執行委員、外交部員會委員、國民政府委員。一九三五年任候補中央執行委員。一九三六年八月任駐米大使。

王 正 驥(子文) Wang Ching-ku (Tz'wen) 浙江省奉化縣人。一八九〇年生。北平大學採礦冶金科卒業。前清進士。米國コロンビア大學採礦冶金科卒業。一九一五年任北京基督教青年會幹事。一九一六年任本溪湖鐵礦公司技師長。一九二二年任奉天鐵務局總辦兼技師長。其他礦業關係の職務及奉天基督教青年會會長、滿洲基督教醫科大學理事等に歴任。一九三一年國民政府實業部礦業司長となれるも同年國民政府改組に際し辭職。王正廷の弟。

王 籍 田 Wang Chien-tien 一九三七年一月任審計部審務次長。王 泉 笙 Wang Chuan-sheng 一九三五年任國民黨第五期中央執行委員會委員。

王 昌 祺(鴻枚) Wang Chang-chi (Yun-mei) 浙江省紹興縣人。一八八七年生。前清上海郵政書院及南京師範學校畢業。辛亥年間佛國文公館卒業。京漢鐵路北段工程處及駐蒙鐵路局蒙自關道署正翻譯、雲南交涉署科長、秘書。一九二八年交涉員の職務を代行し一九三〇年任外交部雲南特派員。

王 昌 元(子春) Wang Chan-yuan (Tzu-chun) 山東省冠縣人。一八六〇年生。北洋武備學堂第一期卒業。若年宋慶の部下として日清戰爭に従軍す。後袁世凱に從ひ昇進して北洋新軍協統となり第一革命に際しては馮國璋に從つて革命軍と戦ふ。民國に入り一九二二年任近衛第二師長。一九三三年任陸軍上將。一九一五年任湖北軍務督辦及湖北督軍。一九一六年任湖北督軍兼省長。同年袁武將軍

四〇

を授けらる。袁世凱の帝制及張勳の復辟に際しては之に策應し袁より壯威將軍一等侯に封ぜられ張より湖北巡撫に任ぜられる。一九二〇年兩湖巡閱使に任ぜられ長江防務の要主として勢力を張り壯威上將軍を授けらる。一九二二年曹錕、張作霖により天津に將軍會議招集せらるるや之に参加せるも同年吳佩孚一派直隸派の壓迫を受けて已む無く辭職し、爾來天津に隱遁し居れる處一九二六年曹錕下孫傳芳が東南五省聯軍總司令となるや其高等顧問に聘せらる。一九二八年張作霖より陸軍檢閱使に任ぜられ奉安方面の山東軍を檢閲せるを最後として隱棲。一九三四年九月天津に於いて死去。

王 善 俊(亮臣) Wang Shun-tsun (Yao-shen) 四川省石柱縣人。一八九四年生。米國大學化學科卒業。南通農科大學、國立北京高等師範學校、國立東南大學農科、江蘇省立第一農業學校及國立浙江大學農學院教授、國立中央大學農學院々々兼作物園藝教授等に歴任。

王 祥 炎 Wang Hsiao-yan 四川省富順縣人。一九〇二年生。建國第五軍諮議となり東北軍駐蒙特派員駐京辦事處主任、陸海空軍總司令部參謀、及軍事聯絡員、國民革命軍北路協同司令部中校參謀、西北國民革命軍新編第二十二軍參謀處長、討逆軍第二十七軍上校參謀、訓練總監部國民軍事教育、訓練處教官、南京市黨部秘書、南京市黨部地方自治推進委員會委員に歴任。

王 善 賢女士 Wang Shun-shan 南京市人。米國西北大學哲學博士。陸軍後備江蘇女子中學校校長、北平燕京大學及國立中央大學教育學教授に歴任する。著書『兒童史地叢書』。  
王 祖 耀(竹齋) Wang Tzu-yao (Chiu-shan) 浙江省杭州人。一八七〇年生。杭州市商會主席委員、東通銀行長、杭州市自來水籌備會主席。曾て國民會議代表たり。

王 祖 康(簡清) Wang Tzu-kang (Chun-ching) 江蘇省丹徒縣人。一八九六年生。米國シカゴ大學哲學博士。北京清華學校機要處主任、國立北京師範大學及上海復旦大學教授、上海時事新報館副經理、大夏大學教育科主任兼教授、上海特別市政府教育局科長、外交部國際司科長、國立中央大學副教授に歴任。

王 淑 芳(慈園) Wang Shuh-fang (Tzu-yuan) 貴州省黔縣人。一九〇〇年生。國立東南大學、貴州陸軍軍官學校第一期卒業。一九二六年以來國民革命軍第一軍司令部秘書長、國民黨漢口市黨部整理委員、浙江省黨務指導委員等に歴任し一九二八年任國民政府交通部簡任秘書。一九三二年任監察院參事、一九三四年任立法院立法委員、一九三五年任南京市府秘書長。同年第五期中央執行委員に當選。一九三六年任立法院立法委員。

王 曾 思(念敏) Wang Tseng-shih (Nien-kan) 江蘇省南匯縣人。一八九〇年生。佛國巴黎大學卒業。在露公使館二等書記官、在伊公使館三等秘書、在佛公使館一等秘書等を經て一九二七年外交部參事、安國軍外交討論會專門委員たりしが北京政府倒後奉天に赴き東北海軍司令部秘書たり。次で露支會議專門委員としてモスコに赴き引續き同地に止まり國民政府駐露外交代表たり。一九三三年任外交部北平協定保管處長。一九三五年辭任。

王 崇 儒 Wang Tsung-ju 山東省海陽縣人。一八八七年生。芝罘育材學校卒業。一九一四年以來芝罘日報を主宰し在芝日本領事館文案を兼ねたるも一九三〇年文案を辭し爾來芝罘日報社長たる防ら有力商家の顧問を兼ね。

王 造 時 Wang Tsao-shih 江西省人。一九〇三年生。北京清華大學卒業。米國ウイコンシン大學、シカゴ大學卒業。更に英國倫敦大學研究員となる。清華大學時代學生會主席となり、五・四

(オ) 王

運動に當りては清華代表團代表、五・三〇運動には北平各校滬案後援會代表となる。在米時代には大學より名譽獎金を受く。米國政治學會會員。歐米日本並に國內各省を歴遊す。光華大學文學院々々長及上海各大學教授に歴任。現在在韓韓士を開業す。著書『米國外交政策史』、『近代歐洲外交史』、『現代歐洲外交史』、『中國問題之分析』、『黨派』等。國家主義派の健將にして、抗日論に著はれ、いはゆる人民戰線派五大領袖の一人たりしが、一九三六年十一月上海邦人結核離華運動の原に因り逮捕さる。

王 大 賁(幹臣) Wang Ta-kun (Kan-shen) 福建省晉江縣人。一八八〇年生。前清舉人。農工商部郎中、山西都督府實業司々長、參議院議員、全國農工銀行籌備處主任、僑務局總裁等に歴任。

王 大 楨(允生) Wang Ta-ching (Yun-sheng) 湖南省人。日本陸軍經理學校卒業後東京帝國大學經濟學部總講生たり。一九二一年より二年に亘り華府會議及山東交還に王正廷部下の委員たり。其後何鍵の參謀長、安徽省軍事廳長に歴任し一九二八年王正廷外交部長たるや殷汝耕に代り國民政府外交部駐日特派員に任ぜらる。一九三〇年何鍵の高等顧問となり何鍵を代表して南京に在り。その後駐日大使館參事官となる。有名なる日本通なり。

王 鏗 鏗 Wang Tsung-king 廣東省東莞縣人。一八八七年生。國立北京大學法學士。廣州市財政局長。

王 卓 然(繼波) Wang Chuo-shan (Chi-pa) 奉天省撫順縣人。一八九三年生。號夢白。瀋陽高等師範英語科卒業。國立北平師範大學教育研究科卒業。米國コロンビア大學教育學士たり。遼寧特派隊米教育觀察員、東北邊防司令長官公署秘書兼顧問、東北大學委員會常務委員及教育系主任教授、北平師範大學、及北平大學講師等に歴任。一九二八年太平洋國交討論會に出席、遼寧省を代表し國民會議



(オ) 王

に出席、北平経済公署事務員、華北建設委員会委員、東北外交研究委員会主任秘書、外交月報社社長兼編輯、東北大學校長兼秘書長に歴任。

王 澤 民 (伯賢) Wang Tse-min (Poh-hsien) 江蘇省淮陰縣人。一八九六年生。無錫中學卒業。曾て財政部司長たること十餘年、財政金融に對して深く研究する所あり。吳鼎昌、王克敏等と平素親交し、華北金融界に於ては重鎮の一入たり。保商銀行總經理たりし時王克敏の紹介により黃郭の下にて北平政務整理委員會經濟組長たりしが、會の解散と共に再び保商銀行總經理の職に就く。

王 謙 (志謙) Wang Tse (Chih-shan) 安徽省涇縣人。一八八一年生。早稻田大學專門部卒業。山東省各縣知事、京兆道尹、安徽省官廳督辦等に歴任。

王 坦 (養伯) Wang Tan (Yang-ber) 奉天省奉天人。一八八六年生。日本陸軍士官學校第八期砲兵科卒業。奉天軍及吉林軍に在りて昇進し一九二二年陸軍中將となり一九二四年祺威將軍を授けらる。一九二二年任北京政府陸軍部參事。一九二三年及二四年前後二回陸軍次長たり。一九二四年勇退す。

王 旦 華 Wang Tan-hua 江蘇省青浦縣人。一九〇三年生。上海聖約翰大學文學士。國立暨南大學南洋文化事業部編輯員、浦東中學及國立上海商學院英文教員、財政部鹽務稽核總所科員等に歴任。因明と『撰擬輿圖』を合譯す。

王 仲 廉 Wang Chung-lien 一九三六年任湖南駐屯軍第八十九師長。

王 謙 文 (伯) Wang Cheng (Wen-p) 吉林省安縣人。一八八七年生。米國ロムジャ大學經濟科卒業。國立北京大學教授交通銀行經理等を経て一九二七年國民政府に入り 財政部總督司長兼

四二

中央銀行長、建設委員會秘書長、鐵道部理財司長、鐵道部常任次長建設委員會委員等に歴任。一九三六年任浙江省政府委員兼建設廳長。

王 澤 慶 (惜予) Wang Ching-ying (Hsi-yu) 浙江省奉化縣人。浙江省興業銀行局司事、國民政府文官處秘書等を経て一九三〇年任浙江省政府委員兼財政廳長代理。一九三二年財政廳長代理を辭す。其後任貴州省政府委員兼財政廳長。

王 長 平 (鴻猷) Wang Chang-ping (Hung-yu) 山東省泰安縣人。一八八六年生。米國ミシガン大學哲學博士。金陵大學教授、東省鐵路事務處副處長、國立北京大學心理系講師等に歴任。『實業教育』。

王 麗 雲 (亮軒) Wang Liang-hui (Liang-hui) 廣東省東莞縣人。一八八二年生。香港皇仁學院、天津北洋大學卒業後團匪事件當時政治研究の目的を以て日本に留學。次で米國に赴きミシガン大學にて法律を専攻す(ドクター・オヴ・シヴィル・ロー)米國留學中獨逸民法を英譯し又米國裁判所協會年報記者たり。後英國に渡りインナー・テムブルに入り一九〇七年バリスターの資格を得。續て佛、獨逸各國に學び伯林國際法學會員となる。歸國後國民黨の革命運動に参加し上海に於ける南北和平會議に南方側委員たり。一九二二年南京臨時政府の外交總長となり次で北京に於ける民國最初の内閣閣議内閣の司法總長たりし唐と共に辭職し上海に赴き中華編輯局を創設し東西文明の紹介に努め一九一四年復旦大學副校長を兼ね。一九一六年廣東に軍務院成立するや同院外交副使に任じ王正廷等と共に情報局を組織し内外に對する宣傳に従事す。其の死後再び北京に赴き北京政府に入り一九一七年修訂法律館總裁となり一九一九年巴里和會議に支那代表として渡歐す。歸來大理院長、法官懲戒委員會委員長たりし一九二二年國際聯盟支那全權として渡歐。華府會

長。一九三三年任北京六河溝礦山會社技術部長。一九二九年東京に於ける萬國工業會議支那代表主席たり。著書『Treatise on Antimony』, 'The Origin and Nature of Love', 'The Bibliography of the mineral Wealth and Geology of China', etc.

王 朝 佑 Wang Chao-yu 日本留學出身。張宗昌の下に直營聯東外交處秘書、外交署日本係主任(一九二七年)たり。『我日本觀』其他日本關係の著書多し。

王 兆 麟 Wang Chao-chen 江蘇省無錫縣人。一八九二年生。米國オハイオ大學卒業農學博士。國立東南大學農科教授、江蘇省立第三農業學校教授兼代理校長、上海市政府衛生局科長等に歴任。

王 鎮 淮 Wang Chen-hui 豫鄂皖贛邊區警務處公署參謀長。

王 廷 驥 (揆一) Wang Ting-yang (Kuei) 江蘇省吳縣人。國民政府內務部民政司長。

王 廷 璣 (子瑞) Wang Ting-chang (Tzu-chi) 浙江省紹興縣人。一八八四年生。白耳義塾、リヂン大学卒業。一九二二年任北京政府外交部條約司科長。一九二三年任大總統府秘書兼外交部秘書。一九二七年任駐墨西哥公使代理二等秘書。一九二三年任香港總領事。同年任外交部條約司長代理。一九二三年任外交部參事。一九二四年任外交部條約司長。一九二五年任國務院特別會議委員及法權調查委員會顧問。一九二六年任駐葡公使。歷々國際聯盟支那代表たり。

王 廷 植 (子明) Wang Ting-chen (Tzu-ming) 河北省天津縣人。一八七六年生。日本陸軍士官學校第一期騎兵科卒業。歸國後袁世凱の幕下に在り。幾多の日本兵書を支那譯す。一九一一年軍事觀察の爲佛國に赴く。第一革命當時歸國し依然袁に隨ひ禁衛軍師長天津鎮守使たり。第二革命に際し鎮壓の爲馬國璋と共に南方に出動。和平後江寧鎮守使兼警備軍師長(後に第十師と改稱)として南京に

(オ) 王

四三

議に際しては支那南北の人氣を負ひ支那全權として會議に参加す。溥米中梁士詒内閣の司法總長に任ぜられ一九二三年歸國後就任顧惠慶内閣に留任し唐紹儀内閣の教育總長に轉じ唐紹儀不就任の爲國務總理を代理し後正式に國務總理に任ぜられ政治討論會長を兼任す。辭職後一九二三年海牙に赴き國際司法裁判所理事に就任。一九二四年海牙内閣の司法總長に任ぜられたるも就任せず海牙に止まり一九二五年國際聯盟支那代表たり。同年歸國後關稅特別會議及支那法權調查委員會に支那代表として参加し一九二六年第三次國際内閣の教育總長に任ぜられたるも間もなく辭し道勝(露亞)銀行整理督辦に任ぜらる。一九二七年南京國民政府成立するや之に参加し司法部長となり國民政府委員、國民政府外交部委員、國民黨中央監察委員、中央政治會議委員等を兼ね次で南京政府の代表として海牙國際司法裁判所に派遣せらる。一九二八年濟南事件後國民政府の海外派遣代表として英米に赴き同年歸國國民政府司法總長、國民政府委員、國民黨中央監察委員、中央政治會議委員として政府及黨の要職に在りしが一九三一年胡漢民の辭職、廣東派の南京離反後の時局の紛糾に際し其立場を失ひ辭職し海牙に赴き國際司法裁判所判事に就任す。一九三五年任第五期中央監察委員。一九三六年國際司法裁判所判事滿期歸國。一九三七年三月任國民政府外交部長。支那第一の法律家なり。

王 曾 佐 (佐臣) Wang Chung-yu (Tso-chen) 廣東省東莞縣人。一八七九年生。香港皇仁學院、天津北洋大學、米國カリフォルニア大學、コロムビア大學に學び探礦冶金學及地質學を修む。在米中探礦冶金學會員となる。一九〇八年歸國後任長沙礦務公司技師。一九〇九年任保泰公司總理。一九一四年任大冶鐵礦總經理。一九二二年任華府會議支那全權顧問。同年任山東礦山返還に關する礦山委員

(オ) 王

駐在大使で長江沿岸要港司令を兼任す。袁の死後、張の下に長江巡  
閱副使となり、一九一九年察哈爾都統に就任せるも翌年安直に際し  
辭職。爾來大總統府秘書長顧問。滿洲軍邊境警備都統、張古前  
衛鎮守使等に歴任し、一九二六年吳佩孚の下に討伐軍軍運顧問令た  
りしが吳の失脚に因り直隸派の洛陽以來天津に閑居す。  
王 天 木 Wang Tien-mu 河北省涿縣人。一八八三年生。前  
清進士。明治大學法科卒業。一九一六年浙江高等檢察廳檢察長たり。  
其後駐智利代理公使たりしが一九三〇年辭職。  
王 殿 之 Wang Tien-chin 奉天省復縣人。一八九四年生。  
米國マサチューセッツ大學卒業。東北大學英文教授たりき。  
王 杜(明如) Wang Tu (Hing) 浙江省杭州人。一八七  
八年生。前清舉人。黑龍江撫署文案處幫辦、奉天省巡警局總辦、綏化  
府黑河府及龍江府知府、黑龍江省公署秘書、警務公所總辦、官督局會  
辦、愛黑商務局總辦、山東省公署秘書、國務院參事、機要局參事、  
黑龍江黑河道尹、大總統府顧問、平政院評事、交通部參事に歴任。  
王 都 慶(雲卿) Wang Tui-ching (Chun-chai) 北京陸軍大學  
卒業。陸軍第十八師步兵第三十五旅々長、陸軍第二十一混成旅々長、  
中央警備隊第七師々長等に歴任。  
王 韜 韜(子猷) Wang Tao (Tao-yu) 山東省福山人。一  
八八〇年生。前清時代在日公使館通譯たりしことあり。民國に入り  
奉天財政廳員、浙江兩湖局長、河南、直隸兩省縣知事、東北政務委  
員會總務處職員等に歴任。一九三〇年北平市政府財政局長となり市  
長代理を兼任。翌年胡若愚の市長代理に就任するに及んで北平市  
政府参事。一九三三年十月天津市長に就任、一九三四年冬同市長を  
辭し天津に閑居す。  
王 東 原 Wang Tung-yuan 湖南省醴陵縣人。一八九二年生。

四四

保定陸軍軍官學校卒業。一九二五年以來唐生智の下に參謀たりしが  
一九二七年北伐軍起るや第三十五軍長何鍵の參謀長に任ぜらる。爾  
來何鍵の下に在りて昇進し、一九三〇年任第十五師師長兼省會警備  
司令。一九三一年任陸軍第十五師長。  
王 統 照 Wang Tung-chiao 山東省人。號鑑三。曾て北京最  
報附刊の『文學旬刊』を主宰す。文學研究會の發起人。著作には長篇  
小説『黃昏』、『一葉』、『短篇集』、『春申之夜』、『箱根』、『散花』、『詩  
集』、『童心』、『這時代』などあり。傳記資料に『我讀小説與寫小説的  
經過』、『我對於文學的理解與經過』等。現在中國文藝家協會理事、  
雜誌『光明』に創作を發表す。  
王 樂(召南) Wang Tui (Chao-nan) 廣東省中山縣人。  
廣東財政廳長、粵漢鐵路管理局々長、廣東大元帥府軍需處長兼會計  
司長、廣東省政府財政廳長等に歴任。  
王 桐(鶴山) Wang Tung-tung (Teh-shan) 河北省任邱縣人  
一八七九年生。東京帝國大學文科卒業。北京政府教育部參事、北京  
高等師範學校教務主任、北京師範大學、北京政法大學、燕京大學、  
北平師範大學等の教授に歴任。著書『東洋史』、『中國史』、『歷代中  
國黨爭史』、『日本觀察記』、『中國民族史』、『陝西旅行記』等。  
王 德 全 Wang Tei-chuan 一九三六年九月任陸軍第五百十六  
師步兵第四百六十六旅長。  
王 德 芳(頌廷) Wang Tei-fang (Sung-tung) 浙江省無錫人。  
一九〇〇年生。上海南洋大學中學部に學ぶ。一九二六年任南米秘魯  
中國公使館員。一九二八年書記官に昇進、リマ總領事。一九二九年  
秘魯代理公使。一九三〇年セレス初代領事。  
王 德 林(厚村) Wang Tei-lin (Hou-chu) 浙江省吳興縣人。  
一八九六年生。北京大學卒業。曾て江蘇淮陰中學校長、江蘇教育廳

(オ) 王

編審、中法大學及孔德學院等の教授たりしことある外國密行行政事  
員公署秘書、江蘇省立州圖書館々長に歴任。  
王 獨 清 Wang Tui-ching 陝西省西安人。一八九八年生。佛  
國、伊太利に留學。一九二一年創造社を設立し『創造』、『創造季刊』  
等を發行。一九二六年廣州中山大學文科學長、創造社封鎖後上海  
に至り上海商務大學教務長となり『展開月刊』を主宰す。詩集『聖  
母像前』、『死前』、『威尼市(Venice)』、『埃及人』、『Dedici』、『銀鏡』、  
『獨清詩集』等あり。『獨清詩集』、『獨清』、『獨清』、『獨清』等あり。  
此外『長安城中的少年』、『我在歐洲的生活』、『獨清』等あり。  
王 請(默軒) Wang Ne (Mo-shuan) 山東省安邱縣人。一  
八八一年生。舉人。民政部主事、山東省教育會々長、師範學堂監督  
衆議院議員、山東實業廳長等に歴任。  
王 通(冀南) Wang Tui-tan (Chi-nan) 奉天省新民縣人。  
一八七〇年生。前清秀才。前清時代東三省總督衙門秘書、阿片稅徵  
集局長及奉天、熱河省の地方官等に歴任し民國成立後一時引退せ  
るも一九一六年張作霖が奉天督軍たるに及び奉天全省清鄉督辦に任  
ぜられ次で奉天省長高等顧問となり一九一八年大總統徐世昌の顧問  
に任じ一九二〇年經濟調查局副總裁たり。同年及一九二二年兩次の  
新張內閣に張作霖を代表して入閣し農商總長に任ぜらる。其後一  
九二二年東支鐵道督辦に又一九二四年農商總長に任ぜられたるも就  
任せずして閑居す。  
王 乃 模(鶴庭) Wang Nai-mo (Hsing-tung) 浙江省人。一八  
八九年生。北京陸軍大學卒業。陸軍第十一師參謀長、督辦河南軍務  
善後事宜公署秘書、西北邊防督辦公署參議兼航空公司、京漢鐵路管  
理局長等に歴任。

四五

王 培 元 Wang Pei-yuan 江蘇省上海人。一八八六年生。北  
洋醫藥學校卒業。米國に留學す。歸國後民權醫院を開設す。紅十字會  
理事たりしことあり慈善事業に努力す。現在江蘇醫院を上海に  
設立し診療に從事し遠東大藥房をも兼營す。  
王 培 騷 Wang Pei-sao 河北省天津人。佛國巴里大學政治  
經濟學博士。上海法政大學教授、國民政府審計院審計第一廳長、  
審計部員等に歴任。  
王 伯 羣 Wang Po-chun 貴州省興義縣人。一八八五年生。  
日本中央大學卒業。早くより國民黨に加入して革命運動に從事す。  
貴州省警中、鐵道省道尹を経て雲、貴兩省(唐繼堯)の代表として  
廣東軍政府に參加し一九一九年上海に於ける南北和平會議に南方代  
表たり。會議決裂後廣東に歸り交通部長代理に就任。一九二四年貴  
州省長に任ぜられたるも袁祖銘一派の反對に迫り遂に就任するを得  
ず。一九二七年南京、武漢兩政府合體後國民政府委員交通部長に就  
任。次で中央特別委員會委員を兼任し財政部長に轉任せるも間もなく  
再び交通部長となり招商局監督を兼ね。爾來中央政治會議委員、  
財政管理委員會委員、中央執行委員會等黨及政府の要職に歴任し例ら  
上海大夏大學校長たりしも、一九三二年末南京、廣東妥協後の國民  
政府改組に際し交通部長を辭す。一九三五年任第五期中央執行委員  
國民政府委員。  
王 伯 元(慎忠) Wang Po-yuan (Hsin-chung) 浙江省慈谿  
縣人。一八九四年生。最初は金寶貴を業とせるが、一九一九年中  
國實業銀行の復活に努力してより次第に金融界に進出し、同行の常  
務董事となれるを初めとして通和銀行、國泰銀行、上海商業銀行等  
の董事長或は董事となる。其他關係事業として錢莊業、保險業、中  
國實業公司、嘉豐紡織公司、中國建設銀行公司監察人、上海銀行公會

(六) 王

執行委員、上海公共租界工部局土地委員會委員、復旦大學校董事たり。  
王 伯 秋 Wang Bo-chiu 江蘇省江甯縣人。日本早稻田大學及美國ハーヴァード大學卒業。國立北平大學政治經濟系主任、江蘇法政大學教授等に歴任。

王 柏 齡 Wang Po-ling (Chao-ling) 江蘇省揚州人。一八八九年生。北洋陸軍軍官學校、日本陸軍士官學校第十期砲兵科卒業。一九三三年任廣東大元帥府高級參謀、一九三四年任黃埔陸軍軍官學校籌備委員。次で同校訓育部長となり一九三六年蔣介石が第一軍を編成するに及び師長に任せられ北伐軍起るや第一軍(何應欽)副軍長たり。後獨立第一師長として江西各地に轉戦せるも南昌の戦に敗れて師長を免ぜらる。一九二七年任長江下流要領司令及中央陸軍軍官學校訓育部長。一九二八年任江蘇省政府委員兼建設廳長。一九二九年任中央執行委員會委員。一九三五年任第五期中央執行委員。

王 普 Wang Pu 安徽省人。安徽陸軍第三混成旅々長、安徽省長、國民革命軍第二十七軍長等に歴任。

王 輔 室 Wang Fu-shih (Chang-shih) 江西省東鄉縣人。一八八三年生。字を以て行はる。東京帝國大學法學部卒業。早くより國民黨に入り第一革命後衆議院議員に選出さる。第二革命後日本に亡命し東京法政專門學校教員たりしが袁世凱の死後歸國し國民政府最高法院推事、國民政府交通部參事兼法規委員會委員長等に歴任。

王 武 科 Wang Wu-ko (Chang-ko) 雲南省騰越縣人。一九〇七年生。北平燕京大學文學士、法學士。在學時旅行隊々長、學生會主席、經濟學會秘書、社會科學研究會編輯及び雲南旅平學會主席兼編輯委員會主任委員、卒業後中國社會、中國合作學

四六

社、中國社會科學研究會等の學術團體に加入。中國南北各省並に香港、安南、緬甸、印度諸地方を旅行す。燕京大學清河試驗區鄉村工作指導主任、中國華洋義賑救災總會農村合作觀察員に歴任。現に全國經濟委員會農業處職員。著書『中國之發展』。

王 鳳 清 Wang Feng-ching 湖北省人。日本陸軍士官學校歩兵科卒業。平津衛戍總司令部參謀處長、國民政府訓練總監部軍組譯處少將編輯主任、軍政部總務廳長、國軍編譯委員會第一編譯區辦事處委員等に歴任。

王 鳳 雄 Wang Feng-hsiung (Chang-hsiung) 湖南人。一八七七年生。法政學校卒業。曾て譚延闓の國民革命軍第二軍軍法官、福建省高等法院長等に歴任。次で一九三六年任司法行政部參事。王 禮 泉 Wang Li-chuan 浙江省人。一八九八年生。日本留學より歸國して上海大學、中國公學の教授を歴任。大江青銅の支配人となり『新學生』を主宰す。譯書『初夜權』、『戀愛與新道德』、『沈淪先と合譯』、『史的唯物論概説』、『中國文學研究譯選』、『中國文學論集』、『新文學概論』、『現代文學十二講』等。

王 復 旦 Wang Fu-tan 江蘇省無錫縣人。一九〇三年生。國立東南大學體育系卒業。在校時足球隊、籃球、トラック隊長。一九二四年中國足球隊を代表して、ニュージーランドに遠征し更にフィリピン及び南洋群島を巡歴す。卒業後國立東南大學商學院體育主任、上海光華大學體育主任、華東體育專門學校教務主任、江南體育專門學校々長、國立暨南大學訓育委員等に歴任。現に上海持志學院體育主任。著書『田徑賽運動』、『運動場建設法』、『中學運動會指南』等。

王 禮 均 Wang Li-chun (Chang-chun) 湖北省黃岡縣人。一八八七年生。日本法政大學卒業。長く許世英に従ひ許の下に北京

政府司法部參事、奉天財政廳長、內務部參事、內務次長、交通次長、蒙藏院副總裁(一九二七年免官)等に歴任。其後國立北平大學教授、國立北平大學法學院教授に歴任。

王 文 蔚 Wang Wen-wei (Chang-shih) 上海同文館卒業。一九二二年任南京臨時政府交通部郵政司科長。一九二四年任北京政府交通部郵政司科長。一九二七年任郵政總局會辦兼內國公債局顧問及郵局監督兼財政部參事。一九三二年任郵政整理委員。一九三三年官界を退いて北京六河溝煤礦公司に入り漢口支店支配人に就任す。

王 文 藻 Wang Wen-hsiao (Chang-shiao) 陝西省三原縣人。審計部秘書、國民政府監察院審計部秘書長等に歴任。

王 文 顯 Wang Wen-hsien (Chang-hsien) 江蘇省崑山縣人。一八八七年生。天津北洋大學、英國倫敦大學卒業。英國に在りて駐歐支那財政委員、倫敦『中國評論報』編輯人、英國新聞協會會員たり。一九一五年任國立清華大學教授、一九二二年任同校代理校長、一九二三年以同校教授に専任し英文學を講ず。著書『支那より見たる世界戰爭』其他。

王 文 藻 Wang Wen-yen 現に第四十師長として四川北部貴州方面に駐す。

王 文 典 Wang Wen-tien 浙江省遂安縣人。一八八一年生。上海國貨維持會長、南洋兄弟煙草公司北支那總支店、露支會專門委員長、農商部商品陳列所審查委員長、中華全國商會聯合會副會長に歴任し一九二八年京師總商會長及天津中華總商會銀行經理たり。

王 文 培 Wang Wen-pai (Chang-pai) 河北省深縣人。米國コロムビア大學卒業。國立北京師範大學及保定河北大學英文教授、國立北平大學女子師範學院教育系講師に歴任。著書『青年職業

(七) 王

指導

王 文 豹 Wang Wen-piao (Shao-chuan) 湖南省長沙人。一八七八年生。日本に留學す。京師警察廳廳長、內務部參事、京師市政公所事務主任、司法部監獄司々長、司法次長代理、燕京大學講師等に歴任す。

王 文 麟 Wang Wen-lin (Chang-lin) 河北省南漳縣人。一八九六年生。米國マサチューセッツ大學卒業。國立北京大學及北京民國大學體育主任、東北大學教育院體育教員に歴任。

王 平 政 Wang Ping-chang (Chang-chang) 山西省解縣人。一八七九年生。東京宏文學院師範科卒業。山西軍政分府民政司司長、國民黨河東機關部長、總理河東觀察使、陝西靖國軍總司令秘書、河南省長公署秘書、山西省政府民政廳秘書、國民政府監察院監察委員等に歴任。

王 秉 鈞 Wang Ping-chun 一九三五年任國民黨第五期中央監察委員。

王 燕 翼 Wang Yen-yeung (Chang-yeung) 河北省深縣人。一八七九年生。早稻田大學卒業。早くより國民黨に入り直隸選出參議院議員たり。天津に於て國民黨の機關紙民立報を經營し袁の帝制問題起るや滿洲に赴き反袁運動に從事す。一九二八年任國民政府立法院立法委員。數年ならずして辭す。

四七

(才) 王

王 傑 (心季) Wang Pao-tsun (Chin-kiang) 湖北省羅田縣人。一八六七年生。國立武昌師範大學教授、湖北省立圖書館長、國立武漢大學文學院中國文學系教授に歴任。

王 法 (勳) Wang Fa (Chun) 河北省高陽縣人。一八七六年生。早くより國民黨に入り直隷に於ける國民黨の領袖として直隷諮議局議員、直隷臨時省議會議員、國民黨直隷支部副長、參議院議員等に歴任し一九二五年孫岳の代表として善後會議に出席す。一九二六年任國民黨第二次中央執行委員。一九二七年任漢口政治委員會委員、國民政府委員、國民政府商民部長、同務部長、同政府政務委員兼武漢政治分會委員。次で同年廣東政治分會委員たりしが廣東共黨事件起るや責任を問はれ、南京當局より免職を辭し付せられたるも間もなく職權回復を許され一九二八年任國民黨中央執行委員、國民政府委員、北京政治分會委員。一九二九年閻錫山、馮玉祥、汪兆銘等反蔣介石派により北平に新政府樹立せらるゝや之に参加し汪兆銘等と共に國民黨擴大會議を組織し其委員たり。反蔣軍敗れて事失敗に移るや天津に潜み爾來廣東を始め全國の反蔣派と呼應して運動を續け居たる處一九三一年末南京、廣東の反蔣派に及び任中央執行委員、國民政府委員。一九三五年任第五期中央執行委員。

王 寶 (慶) Wang Pao-ling (Shan-ling) 河南省開封縣人。一八八〇年生。卒伍に身を起し一九一九年連長、數年ならずして師長に昇進。一九二七年任直魯聯軍第二十師長。一九二八年隱退。

王 寶 (祥) Wang Pao-ling 江西省南昌縣人。一八八八年生。一九一六年上海に和平公報發行を創立し四川、雲南地方の客籍を相手として通關業を經營。一九三〇年利濟煤皮印刷公司を設立せり。

南洋兄弟煙草公司株主、上海印刷業公會委員。

王 芳 (華) Wang Fang (Hua) 河北省任邱縣人。一八八二年生。保定陸軍軍官學校卒業。曾て張宗昌の幕下に在り。北京政府陸軍部司長たり。一九三〇年任山東省政府委員兼糧務廳長(後に實業廳と改稱)一九三四年辭して省政府委員に専任。韓復榘の親戚。

王 鳳 (儀) Wang Feng (Yi) 陝西省郿縣人。一八八五年生。曾て北平大學教育行政院高等教育處々長たりき。

王 鳳 (鳴) Wang Feng (Ming) 河北省天津市人。一八七八年生。二十五歳にして銀號の經理となる。天津商界の領袖なり。天津市商會常務委員、天津會務廳廳長、天津市慈善事業聯合會副會長、大平銀號總經理、天津市銀業同業公會主席、天津市銀行業總聯合會公庫常務理事兼庫長、天津市佛租界華商公會副會長、發行準備管理委員會天津分會常務委員、天津金融維持會委員、國民政府黃河水災救濟委員會河北分會委員、河北省政府賑務委員會兼賑務組主任、河北省黃河水災救濟委員會委員、天津市慈善救濟委員會委員等の職を兼任。

王 鳳 (儀) Wang Feng (Yi) 江蘇省上海縣人。一八五七年生。學人。英國に留學し大學を卒業す。日本公使館參贊、橫濱總領事、浙江交涉使、外交部特派浙江交涉員、湖北郵包稅局長等に歴任。現に上海福利地產公司經理。

王 謙 (獻) Wang Mo (Hsiao-chun) 四川省儀隴縣人。一八八五年生。日本東京帝國大學理學士。國立武昌大學、國立北京師範大學、國立清華大學等の地理學教授並に講師に歴任。現に國立北平大學女子文理學院教授、國立北京大學史學系講師。地理に関する著書多し。

王 璞 (道山) Wang Pu (Yue-shan) 河北省人。一八七五

四八

年生。國立北平師範大學及國立北平大學女子師範學院講師、北京注音字母總所所長、山口高南支那語教師等に歴任。注音字母の發明者にてそれに関する著書多數あり。

王 鳴 (卓) Wang Ming-zuo (Chang-zuo) 江蘇省蘇州人。一八八一年生。清朝時代北支に於て任官、民國後南支實業界に入る。一九二〇年有志と相謀りて上海に實業防止協會を組織しその會長となり基金を集めて孤兒院を設立し千人以上の女子供を收容せり。

王 鈞 (世) Wang Yuen (Shih) 山東省商邱縣人。一八五六年生。幼時讀書せりしが、家に運搬船あり、遂に『書經』の題目となる。三十餘歳の時人を傷けしに因り逃げて青島に入り、ひそかに人に歸つて西洋に行き、轉じて伊太利に行き猶太人と商業をなすこと三十年にして歸國す。北平西直門内大安胡同にて商家を買入れ居住し『書經家裏』の名を以て知る。徒弟たりしもの四、五千人を下す。

王 揖 (唐) Wang Tang (Tang) 安徽省合肥縣人。一八七七年生。原名唐、別署什公。前清進士。日本に留學し振武學校及法政大學卒業。歸國後徐世昌の知遇を受け東三省總督(徐世昌)軍事參議、吉林督辦公署參議、陸軍協統等に歴任。戴鴻慈の隨員として露帝戴冠式に參列し歐洲を漫遊すること二年獨逸に於て軍事學を研究す。歸國後任吉林兵備處總辦。第一革命後徐世昌の紹介に依り袁世凱の幕僚となり大總統府秘書、參議、顧問、陸軍上將將たり國會召集せらるゝや西蔵代表參議院議員として袁の御用黨共和黨を組織し後進歩黨理事として名聲顯はる。一九一四年國會解散後任約法會議安徽議員及大總統府諮議官。一九一五年任參政院參政及江皖賑賑事宜督辦。同年任吉林巡按使。袁の帝制に參預し活動大いに努む。一九一六年帝制取消後段祺瑞內閣に入りて內務總長たりしが

(才) 王

四九

袁の死後辭職し北京に國民大學及中華大學を創設し後進を養ふ。一九一六年佛蘭西國に赴き陸軍組織を研究し歸國。一九一七年再び政界に入り段祺瑞の領袖として新國會の衆議院議長となり安福俱樂部を組織し名義上の黨首となる。一九一九年南北和平會議に朱啓鈴の後を承けて北方總代表に任ぜられたるも南方側の大反對を受け爲に會議停頓し遂に決裂するに至る。一九二〇年安福派の失脚後總代表を免ぜらるゝと共に官位を辭退し逮捕令を發せられ日本に亡命す亡命中許され間もなく天津に歸り段祺瑞の復活運動に參與し居たる處第二次奉直戰役後執政に就任するに及び安徽省長兼軍務善後事宜督辦に任ぜられたるも一九二五年奉天派の南下に因り辭職再び渡日し間もなく天津に歸る。國民革命軍軍津白領後反逆者として逮捕令を發せられたるも依然天津日本租界に潜み佛學の研究に従事すると共に安福派復活運動を參預し居たり。一九三二年任東北政務委員會委員。一九三五年任黨務政務委員會委員。著書『東游草』。

王 右 (豫) Wang Yu (Yu) 國民政府參謀本部總務廳長、參軍處參事たり。

王 有 (審) Wang Yu (Shan) 獨逸柏林大學に學ぶ。上海兵工廠砲廠主任、上海交通大學及大同大學數學教授、上海光華大學數學教授に歴任。

王 有 (國) Wang Yu (Kuo) 江西省興國縣人。一八八七年生。日本中央大學法科卒業。參議院議員、江西內務司長、交通司長兼參議院議員、重慶軍務廳參議、廣東鎮南道尹、雲南市政督辦、廣東軍政府行政部長等に歴任。

王 裕 (光) Wang Yu (Kuang) 江蘇省人。一八九八年生。國立中央大學工學院木工科副教授。

王 又 (庸) Wang Yu (Yung) 江西省興國縣

(オ) 王

人。一八九〇年生。東京高工卒業。江西第一區行政督察專員、江西民政廳長、南昌行營第二廳第一組長、第四廳副廳長、駐四川參謀團第二處處長に歴任し。一九三五年任四川省政府委員兼民政廳長。一九三六年辭職。

王 用 (太慈) Wang Yung-pia (Tai-shan) 山西省猗氏縣人。一八八一年生。山西大學、日本法政大學卒業。歸國後『晉陽日報』主筆。一九三三年山西省選出參議院議員となり國民黨に属したるも一時政友會に入り再び國民黨に復歸す。一九三〇年孫文の命を受け北平、段祺瑞、張作霖との聯絡を謀る。一九二八年任北平政治分會秘書長。その後考試院考選委員會副委員長、立法委員に歴任。羅文幹の後を受けて行政院司法行政部部長。一九三五年任第五期候補中央執行委員。

王 幼 堂 Wang Yau-tung 浙江省紹興縣人。一八八六年生。杭州にて書店に入る。一九一七年上海に大東書局を設立し爾來發展し株式會社となしその常務董事たる外、商務印書館、世界書局、九州書局等の株主たり。

王 揚 漢 (被漢) Wang Yang-han (Chiao-han) 湖北省武昌縣人。一八八二年生。前清進士、日本に留學。兵部及民政部主事、外城巡警總廳衛生處、內城巡警總廳總務處參事、內務部參事、警政司第一科科長、總務廳統計科科長、警政司科長、北平市公安局第二科長等に歴任す。

王 雍 韓 Wang Yung-han 參謀本部浙江省陸軍測量局長。一八八〇年生。日本法政大學卒業。刑部主事、京師地方審判廳推事、雲南法政學堂監督、雲南等審判廳參事、江蘇都督府秘書、奉天北路觀察使、洮昌道尹、國務院秘書、法制局局長、國務院秘書長、內務部秘書長等に歴任す。

五〇

務次長、國民代表會議籌備處評議員等に歴任。  
王 寶 麟 (子周) Wang Pao-lin (Yi-shan) 浙江省紹興縣人。一八八五年生。米國大學卒業。法律博士號を有す。瑞典、諾威公使館二等秘書代理、瑞典及芬蘭公使館一等秘書代理、外交部秘書、政務司科長等に歴任。

王 力 仁 Wang Li-jen 河南省拓城縣人。一八九八年生。米國コーネル大學土木工學系卒業。一九二八年三月任河南省建設廳技正、一九三〇年九月河南省公路局長を兼任。一九三三年八月河南省建設廳工務處長を兼任。一九三四年三月同職を辭す。同年十一月河南省政府秘書處技正となり、一九三五年三月河南省政府秘書處技正室主任兼技正。一九三六年一月任河南省河務局長。

王 陸 一 Wang Lu-i 陝西省三原縣人。一九三三年任監察院秘書長。一九三五年任國民黨第五期中央執行委員會委員。現に中央政治會議委員、中央民衆訓練部副部長、中央政治學校計政學院主任。

王 立 承 (孝慈) Wang Li-cheng (Chiao-shan) 河北省通縣人。一八九〇年生。王鐵珊の子たり。廣西法政學堂卒業。前清末度支部主事、檢査紙幣清理財政處籌辦等に歴任。民國後大總統府秘書、政事堂機密局參事、國務院秘書廳參事等の職に歴任。前に一度通縣河中學教員たりしことあり。現在は北平新平路に隱居し私立尚志中學教員たり。

王 立 明 (子士) Wang Li-ming 安徽省太湖縣人。一八九七年生。米國西北大學卒業。中華女子參政會々長、中華婦女節制協會青年部主任、上海婦孺救濟院々長、家事學校長等に歴任。現に中華婦女運動同盟會副理事長、中華婦女節制協會主任、上海救濟協會秘書、上海家政學園主任。著書『中國婦女運動』、『快樂家庭』、『自強之路』。

日本に於いて結婚す。著作『孝長吉評傳』。

王 慶 善 (芳海) Wang Liang-shan (Fang-hai) 四川省嘉定縣人。一八八五年生。成都武備學堂卒業。一九〇五年前清政府陸軍部より軍隊關係學校調査員として日本に派遣せられたことあり。第二革命に際して成都軍を率ゐる革命軍と戦つて重慶に出で、川東觀察使に任ぜらる。後貴州軍と衝突して免職せられたる間も無く復職し征滇軍游擊司令たり。一九二〇年山東省福山縣知事たりしことあり。後劉湘の部下となり重慶衛戍司令兼戒嚴司令、川軍第二十八混成旅長、江巴衛戍總司令兼團練總監、川軍第三師長に歴任し共產黨彈壓に最も力を盡し一九二九年任陸軍第二十一軍第三師長。一九三四年免職。一九三五年十月任四川善後督辦公署總參議。劉湘の病師。

王 儼 (外) Wang Yen (Chien-wei) 浙江省臨海縣人。一八九二年生。北京陸軍大學卒業。國民革命軍第一軍參謀長、國民政府參謀本部高級參謀長等に歴任。一九三三年任參謀本部第三廳長。一九三五年免職。

王 麟 閣 Wang Lin-ko 河北省大興縣人。一八八〇年生。米國カラリナ大學卒業。民國初年より外交部に在り。一九一三年任總領事。一九一四年任直隸交涉員。一九一八年任晚香坡領事及駐米支那公使館二等秘書。一九二一年任外交部參事兼直隸保商銀行經理及在マニラ總領事。一九二八年ハワイ總領事、同年西班牙代理公使。一九三一年兼德國牙代理公使。一九三三年グアテマラ總領事。一九三六年免職。

王 齡 希 Wang Ling-tai 湖北省黃岡縣人。一八八八年生。日本帝國大學法科卒業。一九三三年任司法院參事。

王 禮 錫 Wang Li-tse 江西省人。上海神州國光社總編輯。文學研究深く現在古文の研究中。一九三一年流作家陸晶清女士と

(オ) 王

五〇

王 錫 勳 (勉) Wang Li-shan (Chien-shan) 山西省臨汾縣人。一八八六年生。東京皇家大學土木工學科卒業。山西大學工學系各學院教授、交通部參事、山西督軍公署秘書、山西省知事考試委員長、山西省政府委員、兼山西建設廳々長(一九二八年)山西水利工程局々長兼工程師に歴任。現に山西大學校々長兼各學院教授の職にあり。

王 和 (仲清) Wang Ho (Chung-ting) 廣西省人。一八九九年生。元上海特別市政府財政局長。

王 和 華 Wang Ho-hua 東北陸軍砲兵第一旅々長兼第四團團長たり。

王 淮 琛 (厚清) Wang Hui-shen (Hou-chin) 安徽省六安縣人。



(才) 汪

人。一八八三年生。一九〇八年日本中央大學卒業。北京政府司法部參事、民事司長、一九一八年任雲南高等檢察廳檢察長。後湖南高等檢察廳檢察長、國民政府司法行政部司長等に歴任。

汪 璽 (Wang Ya-shen) 原籍安徽、浙江省に寄附す。一八九〇年生。日本東京美術學校卒業。中日美術展覽會に参加及歐洲諸國に繪畫を出品。一九二一年歐洲各國を旅行し藝術及藝術教育を研究す。國內各藝術學校の教授たる二十餘年、現に上海新華藝術專科學校教授。著書『藝術論文集』。

汪 詒 (Wang Yeh) 湖南省華化縣人。一八六七年生。長沙縣立醫院に學ぶ。前清進士。翰林院編修。前清廣西及山西提學使、山西布政使、民國に入り長沙國監督兼外交部特派湖南交涉員、國民政府行政院高等顧問等に歴任。

汪 維 (Wang Wei) 安徽省婺源縣人。米國ロムビア大學新聞科卒業。曾て上海光華大學新聞學教授、上海申報新聞總理たり。

汪 英 (Wang Ying) 安徽省婺源縣人。米國ロムビア大學新聞科卒業。曾て上海光華大學新聞學教授、上海申報新聞總理たり。

汪 榮 (Wang Jung-pao (Kun-tu)) 江蘇省吳縣人。一八七八年生。五色旗の孝養者。幼時より文名あり京太炎と並稱せられ前清時代漢文勅諭を起草せり。一九一〇年早稲田大學に學ぶ。前清政府の民政部右參議、貴族院議員、協贊憲法大臣、民政部左丞等に歴任し民國成立後參議院議員、衆議院議員たりしが一九一四年任駐白耳公使。一九一五年任憲法起草委員。其後駐瑞西公使を経て一九二三年任駐日公使。一九二七年張作霖大元帥に就任し潘復内閣

開成や外交總長に擬せられたるも辭して受けず。國民政府全國統一後も引續き駐日公使たりしが一九三一年夏歸國歸任し北平に赴き張學良の下に陸海空軍副司令官行營參議、外交委員會委員長たり。故人。

汪 漢 (Wang Han) 浙江江山縣人。國民政府工商部秘書、秘書長、工商部參事等に歴任。現に實業部參事たり。

汪 金 (Wang Chi-chang) 江蘇省人。日本に留學す。江蘇省立醫學專門學校校長、上海公立醫院院長、中華民國醫藥學會副會長等に歴任。現に上海に醫師を開業す。

汪 希 (Wang Hsi) 浙江省杭縣人。黃郛國民政府外交部長當時の外交部秘書長、葛敬恩青島市長當時市政務秘書長たり。

汪 熙 (Wang Hsi) 浙江省杭縣人。一八九六年生。米國マサチューセッツ工業大學機械科卒業。國立北京工業大學教授、東北大學工業學院機械系教授に歴任。

汪 熙 (Wang Hsi) 浙江省杭縣人。一八九七年生。米國シカゴ大學哲學博士。廣州國立中山大學心理學教授。小説家として知られ、作品『雪夜』。

汪 熙 (Wang Hsi) 浙江省杭縣人。一八九八年生。日本帝國大學農學士。國立北京農學院教授、國立中央大學農學院作物科副教授、國立北平大學農學院教授に歴任。

汪 熙 (Wang Hsi) 浙江省杭縣人。一八九九年生。南京河海工科大学教授、太湖流域水利工程處技師、標準委員會技正兼工程師に歴任。

汪 熙 (Wang Hsi) 浙江省杭縣人。一八九九年生。南京河海工科大学教授、太湖流域水利工程處技師、標準委員會技正兼工程師に歴任。

一八八一年生。日本陸軍士官學校第五期騎兵科卒業。初め盧永祥の部下たりしが一九二四年江浙戰役後孫傳芳に従ひ夏超の浙江獨立と共に夏より浙江軍總司令に任ぜられ一九二六年陳儀が浙江省長となるや省長公署參議たり。間もなく陳儀に従つて辭職、陳と共に國民政府に入り任國民政府訓練總監部部長。

汪 國 (Wang Kuo) 江西省彭澤縣人。一八八六年生。國立北京大學文學士。南昌心遠大學文科主任、兼中國文學系主任、國立中央大學中國文學系副教授に歴任。

汪 士 (Wang Shi) 安徽省舒縣人。一八七一年生。前清進士。一九〇七年以來直隸總督楊士驥の總文案たりしが一九一一年任調查局總辦及長蘆鹽運使。一九一二年任清理財政局坐辦。一九一四年任直隸財政廳長。一九二〇年任新雲鄂內閣財政次長。一九二一年任菸酒事務督辦。一九二六年任稅務處會辦。一九二七年任潘復內閣國務院參議。

汪 時 (Wang Shih) 江蘇省蘇州人。一八九三年生。東吳大學高等部卒業、速記術を修得す。佛語を北京にて修學す、郵政部に奉職し一九二一年湖南、安徽省陸軍關の郵務局長、安慶郵政局局長、北京總郵務署等に勤務。後郵務事務を辭し一九一八年北京國務院に勤務一九二四年まで會計科員へ、一九三二一九九年同副署長、一九二九年雲南省大理府の關務稽核處に轉任。

汪 珍 (Wang Shen) 安徽省婺源縣人。一八七一年生。前清拔貢。刑部主事、京師外城巡警總辦兼外事外城警備處坐辦、奉天高等檢察廳檢察長、民政部郎中、黑龍江高等審判廳々丞、黑龍江提法使、司法次長、福建廈門道々尹、汀漳道尹、國民代表會議籌備處秘書長、國務院秘書長等に歴任。現に國民政府服務委員會常務委員たり。

汪 鴻 (Wang Hung) 內蒙古喀拉沁人。一八八九年生。曾て金永昌等と共に喀拉沁旗第一回留學生として日本に赴き振武學校を経て慈惠醫學專門學校に學ぶ。歸國後北京政府蒙藏院翻譯官及典禮司員となり蒙藏專門學校教授を兼ね。其後蒙古活字を完成し北京に蒙文書局を創設して蒙古書籍の刊行に從事し現在に至る。

汪 申 (Wang Shen) 安徽省婺源縣人。一八九五年生。佛國に留學し建築學を修む。一九二五年歸國し北平中法大學、北平大學の建築學教授、北平研究院、故宮博物院建築技師等に歴任。一九三一年任北平市政府工務局長。

汪 世 (Wang Shi) 湖北省嘉魚縣人。一八八八年生。多年何成清に隨從し一九三〇年以來湖北に在りて湖北省保安團長、第三軍團總指揮部部長站主任、鄂北軍事特派員等を経て漢口市公安局長たりしが一九三二年辭任。

汪 清 (Wang Ching) 四川省人。一八九九年生。一九二三年北京大學卒業。卒業と共に中華協約委員會秘書に任命さる。一九二四年中國大學出版部編輯となり、中國大學生及び職員等と『曙光』『批判與自由週刊』兩誌を組織しその編輯にあたる。一九二六年任雲南省副領事法官。一九二七年歸國して外交部公報局に勤務。一九二八年マニラ總領事館法官。一九二九年バンクーバー領事一九三〇年任シカゴ總領事。

汪 靜 (Wang Ching-chih) 安徽省懷遠縣人。一九〇二年生。詩集『蕩的風』『寂寞的國』小説集『耶穌的吩咐』『翠英及其夫的故事』『父與女』等。五・四運動後詩作を始め章平伯、宗白華とともに白話詩をもつて知らる。當時の代表作『蕩的風』その後小説に轉向、『耶穌的吩咐』『父與女』等は青年間に愛讀さる。作品の特色は大陸に描寫する點に在り。曾て暨南大學、建設大學教授、南京中

(オ) 汪

學國文學門主任に歴任。現在安徽大學教授。夫人符竹英女士に『未竟の女像』の著あり。

汪 祖 (通稱) Wang Tzu-tse (Tung-tse) 廣東省番禺縣人。一八七九年生。日本明治大學法科卒業。廣東司法研究館監督。廣東法政學堂教員。廣東高等審判廳刑庭々長。廣東司法司副廳長。廣東都督府司法司參事。京師總檢察廳檢察官。國民政府最高法院檢察署檢察官等に歴任。

汪 大 雙 (伯榮) Wang Tai-shuang (Po-shang) 浙江省杭縣人。一八五八年生。前清時代留日學生監督。歐洲留學生監督を経て一九〇五年任駐英出使大臣。一九〇六年任外務部右侍郎。一九〇七年任考察英國憲政大臣。一九〇八年任郵傳部左侍郎。同年任駐日公使。民國成立後一九一三年駐日公使を辭して、龍濟光内閣の教育總長となり一九一四年平政院長兼參政院副議長に任ぜらる。一九一六年袁世凱死後の段祺瑞内閣に交通總長となり間もなく辭職。次で一九一七年大正天皇に大勳章贈呈の爲特派專使として渡日す。歸來段祺瑞内閣の外交總長たり。一九一八年巴里平和會議に際し外交委員長となり一九二〇年中國赤十字社總裁に就任す。一九二二年華府會議後の外交諸問題解決に關する委員會議員長に任ぜらる。同年再度平政院長及紅十字會總裁となり日支間山事協定の調印に際し一時國務總理兼財政總長に就任せるも旬日にして辭し三度平政院長となる。一九二五年全國防務委員會委員長及外交委員會委員長に轉ぜらる。同年四度平政院長に就任し仍ち各種社會事業、慈善事業に關係す。一九二七年官界を引退し紅十字會副總裁、東方總協會副會長たりしが後北京に於て逝去す。享年六十九。

汪 壽 經 Wang Shou-king 安徽省旌德縣人。米國マサチューセツ工學大學化學科卒業。國立北京師範大學化學教授、上海光華大學化學教授に歴任。

華大學化學教授に歴任。

汪 仲 章 Wang Chung-wei 安徽省徽州人。上海「新聞報」副總理。新聞報社長兼總理汪伯奇の實弟にして新聞報營業部を擔當し専ら經營の術に當る。

汪 仲 賢 Wang Chung-shan 廣東省番禺縣人。一八八五年生。日本法政大學卒業。革命思想の宣傳に努む。一九一二年清國の攝政王廢位の暗殺を企て失敗に終り捕はれて死刑の宣告を受けたるも、肅親王に其奇才を惜まれ死一等を減せられて監禁せられ第一革命後釋放せらる。同年上海に於ける南北議和會議に參與して活躍し北方全權唐紹儀を抱込み遂に袁世凱と孫文を握手せしむ。一九一三年第二革命失敗後外國に赴き社會學及文學を研究す。一九一六年歸國し巴里平和會議に際し廣東政府代表を命ぜられたるも受けず非公式に再び渡滬す。爾來廣東政府に在りて孫文を輔佐し一九二二年任廣東教育會長、廣東省政府

最高顧問。一九二三年任廣東參議。一九二四年任國民黨中央執行委員孫文の死後は胡漢民、唐紹儀と共に國民黨の中心となり一九二五年國民政府政治委員長及宣傳部長たりしが一九二六年國民黨左右兩派の糾紛激化し孫文の共黨黨に對するクーデター斷行を見るや孫と意見を異にし廣東を去りて外遊す。一九二七年國民政府武漢進出後漢口に於ける中央全體會議の決議により迎へられて歸國し上海に於て武漢派、蔣介石派の糾紛に對し陳獨秀と共同聲明を發表す。然も依然孫と意合はずして武漢に去り共黨黨分離後の武漢政府の主腦者となり蔣下野するや南京、武漢兩政府を合體して統一政府を樹立せるも中央全體會議開催に失敗し下野を聲明す。間もなく武漢、南京、西山三派會議の結果中央特別委員會成立するや同委員及國民政府委員、軍事委員會主席團委員、外交委員會委員、中央黨部組織部主任に擧げらる。唐生智一派が政治分會廢止に反對して武漢政治分會を設立するや之が調停に奔走したるも失敗に終り唐生智討伐令發せらるるや廣東に赴く。蔣介石日本より歸國すると共に上海に於て孫と會見の後之を提議して國民黨第二次中央第四全體會議準備會議を開催したるも廣東に共黨黨事件起り其責任を問はれ各方面の攻撃を受けるに及び政界引退の聲明を發表して佛國に去る。一九二九年冬秘かに歸國し香港に在りて廣西軍及張發奎軍を指導して反蔣運動に従事す。一九三〇年秋北方に於ける閻錫山、馮玉祥一派の反蔣派と聯絡し西山派を加へて北平に國民黨中央擴大會議を招集し新に國民政府を組織し反蔣派の大團結を策したるも閻、馮軍敗れ北平政府瓦解するに及び一時太原及天津に在りしが一九三一年奉香港に赴く。次で蔣介石、胡漢民の糾紛に依り廣東國民政府樹立せらるるや迎へられて同政府組織に參與し北支の反蔣派と策應して蔣の下野を要求す。同年末蔣の國民政府主席及陸海空軍總司令辭職により南京政府

と妥協し一時統一政府の行政總長たりし孫科辭任の後を受けて一九三三年初行政總長に任じ次で鐵道部長を兼ね軍事を蔣に委ねて自ら政務に當り所謂蔣、汪合作政府を組織せり。然るに數ヶ月にして張學良が滿洲回復に何等の努力も擧げず只軍費を求むることのみに急なる理由として張に辭職を勸告すると共に自らも一切の官職を辭すと稱し上海に去れる處蔣介石が百萬圓に努め張の北平綏靖公署主任を免じて同公署に代ふるに國民政府軍事委員會分會を北平に設置し蔣、張兩派外北方將領を委員たらしむるに及び國民政府よりは退くも國民黨中央執行委員會常務委員として黨務に當り外より政府を援くこととして妥協せり。一九三三年再び行政總長となり、羅文幹外交部長を辭するや兼任外交部長。一九三五年末國民黨四期六中全會に於いて刺客に狙撃さる。同年任中央常務委員、國民政府委員、中央政治委員會副主席。一九三六年二月外遊。一九三七年一月歸國して五期三中全會に出席す。著書『巴里會議後の世界と支那』(英文及支那文)『汪精衛文集』其他。

汪 傑 然 Wang Tsiang 安徽省人。上海大同大學卒業。章澤中學、復旦實驗中學教員を歴任。著作『論辯文作法』、『當代文粹』、『天才底努力』、『現代世界文學概觀』。

汪 東 旭初 Wang Tung (Tung-tse) 江蘇省吳縣人。一八八九年生。日本早稻田大學卒業。江蘇都督府秘書、大總統府法政諮議、內務部編訂制會々員、政事堂制館秘書主任、內務部參事、國立中央大學學院中國文學系主任兼副教授に歴任。現に國立中央大學文學院長。

汪 德 義 (義松) Wang Teh-ying (Yeh-ung) 四川省巴縣人。一八七四年生。前清時代吉林の縣知事たりしが第一革命に際し退官歸郷す。大滬銀行重慶分行總理、重慶商務會協理等に歴任す。

(オ) 汪

(オ) 汪、翁  
汪伯奇 Wang Bo-ki 安徽省徽州人。一八九四年生。上海「新聞報」社長兼總理。上海新聞公會執行委員、懷谷雜誌社、前總理汪漢溪の子。上海聖約翰大學卒業。父の後を受けて一九二五年上海新聞報社長となり一九二九年社長米人フアードソン隠退の後社長を兼ね。  
汪瑞(符譯) Wang Fan (Hsiao-chun) 江西省樂平縣人。一九〇四年生。日本東京工業專門學校密着卒業。江西省立陶業學校教務主任兼工場主任、江西製業公司技師に歴任。現に實業部技士中央工業試験所密着試験主任たり。化學工業に關する著作あり。  
汪量 Wang Liang 安徽省人。天津南開大學卒業。交通部秘書、外交部臨時辦事處を組織せり。現に駐ヨハネスブルグ總領事兼葡屬東ア、英領ローデシア、白茅地、地コング等各地華僑事務を司る。  
汪彭年(復考) Wang Peng-nian (Gou-dan) 安徽省旌德縣人。一八八二年生。日本法政大學卒業。上海神州日報主筆、衆議院議員、安徽鳳陽關監督等に歴任す。  
汪懋(典存) Wang Mou-tsi (Tien-sun) 江蘇省吳縣人。米國コロムビア大學卒業。國立北京師範大學教務長、江蘇省立蘇州中學校長に歴任。著書『米國教育概論』。  
汪有麟(子健) Wang Yü-hing (Tzu-chen) 浙江省杭州人。一八七九年生。日本法政大學卒業。前清政府商部商業總編輯長、京師大學教務、南京臨時政府法政局參事を経て一九二二年北京政府陸軍部内閣の司法次長に任ぜらる。一九二四年任參政院參政、一九二八年任參政院議員。一九二九年上海に於ける南北和平會議に北方代表として参加。一九二〇年安徽派の機關紙「公言報」の編輯長と

なる。一九二二年以來北平湖陽大學校長たる傍ら辯護士たりしが一九三三年湖陽大學校長を辭任す。  
汪揚寶(寶甫) Wang Yang-pao (Yü-pao) 江蘇省吳縣人。一八八四年生。汪榮寶の弟。東京帝國大學農學部卒業。留日學生監察員、北京政府農商部通政司長、湖北實業廳長、在橫濱總領事等を經て外交部條約委員會委員たりしが一九三五年免官。  
翁榮(榮洲) Weng Chung-ang (Chung-ang) 福建省閩侯縣人。日本法政大學卒業。學部主筆、福建提法司刑科科長、京師地方檢察廳檢察官、天津地方審判廳長、總檢察廳首席檢察官、國民黨武漢政治分會秘書長、司法官懲戒委員會委員、湖北高等法院院長等に歴任。  
翁之(之振伯) Weng Chih-hin (Chieh-po) 江蘇省常熟縣人。日本陸軍士官學校工兵科卒業。北京政府陸軍部軍械司長、奉天兵工廠督辦を歴任。現に軍事委員會審計廳副廳長たり。  
翁耀琛 Weng Shao-chen 會て揚由關監督たりき。  
翁耀垣 Weng Chao-huan 廣東省人。一八九三年生。廣東軍官學校卒業後廣東省軍に入り隊長として活動す。一九二五年渡日して日本士官學校に入學、一九二九年同校卒業。更に渡佛して巴里の統率學校に入學航空術を修得し、歸國後廣東軍第二師第四旅長に任命さる。十九路軍編成さるや同軍第七十八師第五十六旅長となる。同軍が上海、南京に移駐する共に上海事變には第六旅長として日本軍に對抗せり。十九路軍福建に移駐するに及んで旅長

を辭して海南島方面に行き華僑に對し飛行機獻上基金の募集をなせり。一九三三―三四年の福建獨立運動に参加せるが之が失敗に歸してよりは海外に遊歷す。  
翁文瀾(文瀾) Weng Wen-hua (Yung-wen) 浙江省都縣人。一八八八年生。一九二二年早稲田大學卒業(ドクター・オヴ・サイエンス)。一九二三年任北平地質調查所長。一九二三年任農商部技師。一九二七年任實業部技師。一九二八年辭して清華大學教授となり一九三〇年秋一時同大學校長を代理す。又屢々支那代表として太平洋科學會議、萬國地質學會等に出席す。一九三二年十月任教育部長、一九三三年辭職。一九三五年任行政院秘書長。軍事委員會資源委員會秘書長、中華文化教育基金會董事、中國科學社社長、中國政治學會會長たり。著書『中國礦產誌略』『中國礦產概要』『礦法要義』其他。  
翁耀衡 Weng Yao-hung 廣東省順德縣人。一八八九年生。セント・ジョンス大學卒業。輸出入、信託、紡績事業に従事、一九二四年任屈臣氏汽水廠總支配人。今日にては支那唯一の斯業大工場なり。

「伊太利ファシストの專政」。  
歐陽(借田) Ouyang Chu (Chieh-tao) 廣東省中山縣人。保定陸軍軍官學校卒業。孫文が上海に於て光復軍を組織せる際之に加はり後孫文に隨つて廣東に歸り大元帥府高級副官、公安局督察長兼討賊軍第一路司令部參謀長、獨立第一師團團長を経て第六軍第十七師長たり。一九二七年國民黨清黨後任廣東虎門要塞司令、海軍警備司令。一九二九年南廣城後任廣州市公安局局長兼廣東全省保安處長。一九三〇年公安局官制の改正により退任。  
歐陽(少白) Ouyang Keng (Shao-pai) 廣東省中山縣人。一八五九年生。米國エール大學卒業。パナマ、バタヴィア及瓜哇總領事、駐英公使館一等秘書、駐智利代理公使に歴任。  
歐陽山 Ouyang Shan 『中國文藝工作者』同人。新進作家。著書『七年忌』『夢一様の自由』『青年男女』。  
歐陽予倩 Ouyang Yü-ching 湖南省瀏陽縣人。日本早稻田大學卒業。一九〇七年東京に於いて在留支那學生の組織せる新劇團春柳社に参加し、馬彥祥と『黑奴天譴』『梅娘』に出演せり。一九二二年陳大悲、汪仲賢等とともに民衆戲劇社創立。一九二三年『戲劇協社』に加入し、同年九月自作『燈籠』を上演す。一九二八年田漢、徐悲鴻等と『南國藝術學院』を上海に起し、左明、鄭君里、王厄南、唐叔明等を養成す。一九二九年二月唐叔秋、胡春冰等と廣東戲劇研究所を組織し『梅娘』、『怒吼吧中國』を上演。同年冬『摩登社』設立。一九三六年明星公司に入社し編劇委員會主任兼監督となる。同年中國文藝家協會候補理事に挙げらる。新劇の泰斗たるのみならず演劇女形俳優としても第一流なり。會つて張蓉に

歐元(懷安) Ou Yuan-hua (Kwai-an) 福建省莆田縣人。米國コロムビア大學卒業。廈門大學、上海光華大學、國立政治大學各教授、上海政治分會教育委員、國民政府交通部視察、大夏大學副校長、共同租界工部局教育委員等に歴任。  
歐富強 Ou Fu-chang 廣東省中山縣人。一九〇三年生。上海共同租界工部局經營の學校卒業後歸郷して嶺山業に従事。後上海にて靈生油廠を設立。  
歐陽格 Ouyang Ko 江西省貴溪縣人。一八九五年生。吳淞海軍軍官學校卒業。豫章及飛鷹艦長、海軍陸隊司令に歴任。譯書

(オ) 翁、歐、歐陽

(才) 歐陽、應、恩

招かれ南通に於いて戲劇學校を主宰したることあり。又一九三三—四年の福建革命にも参加せり。歐陽に關する著書多し。

歐陽振聲(漢名) Ou-yang Chen-sheng (Chun-sheng) 湖南省寧遠縣人。一八七五年生。日本早稻田大學政治經濟科卒業。臨時參議院議員、衆議院議員、上海中華新報總理、農商次長、湖南省議會議長に歴任。

歐陽祖經(仙船) Ou-yang Tzu-king (Hsien-chuan) 江西省南昌人。一八八四年生。東京高等師範學校卒業。南昌心遠大學教授、江西省政府教育廳科長、國立北京女子師範大學教授主任、江西省立圖書館長、中華圖書協會監察委員等に歴任。著書『歐美女子教育史』其他。

歐陽琳 Ou-yang Lin 國民政府軍事參議院參議。

應雲衛 Ying Yun-wei 明星影片公司監督。最初或船會社に在りしが演劇に對する熱やまず。終に支配人の地位をすて、演劇界に身を投ず。一九二二年冬、谷劍塵と共に上海に戲劇協社を創立し、汪仲賢、歐陽予倩、洪深等を容れて強化し、主として自然主義演劇を上演す。五・三〇事件起り民衆の思想が革命に轉向するや戲劇協社は没落。一九二九年再び戲劇協社を挽回し汪仲賢と共に『血花』を上演す。一九三〇年中國左翼演劇聯盟に参加。一九三一年八月杭州に於いて南國社の唐槐秋と共に、杭州青年會の演劇大會に参加し公安局員のため突如逮捕さる。演劇事業、上海事變の際に學生の劇聯を指導し、滿洲事變第二週年たる一九三三年上海佛租界黃金大戲院に於いてトリゾフの『吼えろ支那』を上演して好評を得ず。一九三四年映畫界に入り一九三四年電通公司に於て傑作『桃李劫』を發表。更に藝華公司に正式入社、一九三五年『時勢英雄』を製作、『藝華』が不振状態に陥るや南京の中央黨部の中央戲劇學校の教師

五八

に招聘されて南京に赴きたるが、一九三六年六月明星公司の第二撮影所擴張と共に撮影所長に迎へられる。舞臺監督としても映畫監督としても第一人者なり。作品『第二夢』『小奶奶的扇子』『怒吼吧中國』等映畫『桃李劫』『時勢英雄』『生死同心』映畫三本とも支那映畫を代表するものにて『桃李劫』は不朽の名作といはる。

應時(海泉) Ying Shih (Hsueh-chuan) 浙江省興縣人。一八八六年生。巴里大學法學博士。修訂法律館副總裁。外交部條約研究委員會顧問、法權討論委員會顧問、司法講才館教授、上海租界臨時法院判事、上海特區地方法院民事庭長、東吳大學及中國公學教授等に歴任。

應尚德(潤之) Ying Shang-te (Jun-chih) 浙江省奉化縣人。一八八六年生。米國ロムビア大學卒業。天津南開大學及南京金陵大學教授、國民政府外交部秘書、總務司科長等に歴任し總務司長たりしが一九三二年辭職。一九三三年任外交部條約委員會委員。一九三六年任駐米大使館參事官。

應振(復興里) Ying Chen-fu (Tzu-fu) 奉天省遼陽縣人。一八八四年生。日本陸軍士官學校步兵科卒業。參謀本部科員、科長、陸軍第八師參謀長、砲兵第八團々長、歩兵第十八旅々長、東北陸軍第十六旅々長、東省特別區域地政局長、軍事參議院參議に歴任。

應成(一) Ying Cheng-i 浙江省永康縣人。米國に留學す。上海大夏大學文科主任、光華大學社會學教授、復旦大學社會學系主任、中國公學法科學科長兼教育社會學系主任に歴任。

恩(謙泰) En Hsia (Chun-tai) 江蘇省江縣人。一八七九年生。前清進士。日本法政大學卒業。學部員外郎、總務司司長、資政院議員、勸業院參議、法制局秘書、政治會議委員、司法部司法公報處々長、政事堂主計局參事、衆議院議員、司法次長、東北

大學校長等に歴任。

恩克巴圖(子榮) En-ko-pa-tu (Tzu-king) 察哈爾省人(蒙古人)。一八八九年生。察哈爾の名門家統金詩の甥。北京の蒙古西藏語學校卒業後日本に留學す。留學中中國同盟會に加はり一九一三年察哈爾選出衆議院議員たりしが一九二二年廣東護法政府成立するや南下し非常國會議員、大總統府最高顧問に任ず。其後國民黨第一次、第二次中央執行委員、中央政治會議委員、第三次中央監察委員、國民政府立法院委員、黨務委員會委員等の要職に歴任し一九三一年末以來中央監察委員たり、その後國民政府委員に擧げられ、一九三五年任第五期中央監察委員。

溫(維) Wen Yehing 廣東省台山縣人。一八八五年生。米國ハーヴァード大學理學博士。國立北京大學物理學教授、北平稅務學校々長、國民政府交通部無線電管理局長、財政部參事等に歴任。一九三六年任電政司長。

溫應(勳緒) Wen Ying-hsiang (Hsiao-shun) 廣東省台山縣人。一八八七年生。米國ウェスト・ポイント陸軍士官學校に學ぶ。一九一〇年歸國。一九二二年任上海市政府參議長。一九一三年任孫文秘書及廣東省政府參議次長。一九二二年任東支鐵道警備隊長。一九二三年任東省特別區域警務長。一九二八年任北平清華大學校長。一九三〇年任國民政府財政部鹽務稽核秘書、鹽務署辦公處長。一九三三年任上海市政府公安局長・宋子文の親戚。

溫源(寧) Wen Yuan-ning 廣東省陸豐縣人。一八八九年生。英國劍橋大學卒業。國立北京大學英文系主任、國立清華大學外國文學系教授、國立北平大學女子師範學院外國文學講師に歴任。現に立法院編譯處編修(心得)一九三六年たり。

(才) 恩、溫

五九

重慶市總商會主席、『商務日報』社長。重慶に製絲場を經營す。

溫(壽) Wen Shao-chuan (Ching-shan) 山西省洪洞縣人。一八八一年生。日本陸軍士官學校第六期砲兵科卒業。早くより閩錫山に從ひ第一革命後山西都督府軍務司長たり。一九二五年直隸派没落後の義後會議に閩錫山代表として参加す。一九二七年任國民政府軍事委員會委員。一九二八年任太原政治分會委員及山西黨務指導委員。山西軍の京津地方占領後一九二八年任河北省政府委員兼建設廳長。一九三〇年閩の先鋒奉天軍の入關と共に山西に引揚げ爾來山西代表として南京に在り。

溫(樹) Wen Shu 山東省人。元南方海軍總司令たりしが一九二三年北京政府と妥協して北歸し任渤海艦隊司令。一九二四年任渤海艦隊總司令兼海軍副司令。一九二五年任膠濟鐵道商埠事宜及東北艦隊司令。其後浦復内閣の海軍次長に任ぜられたることあり。

溫(承) Wen Cheng-shan (Ching-shan) 山東省文水縣人。一八八六年生。山西大學卒業。山西省聯合會秘書長たること多年一九二八年任東北關監督。

溫(珍) Wen Shen-chuan (Ching-shan) 河北省天津縣人。一八七七年生。一八九八年北洋海軍學堂卒業。一九一三年任北京政府外交部特派浙江交涉員。一九一六年任江西總督李純の外交顧問。一九二〇年任金陵關監督兼南京交涉員。一九二二年任華府會議支那代表。一九三三年特命全權大使を以て待遇せらる。一九二四年任江蘇關監督兼特派江蘇交涉員(上海)。第二奉直戰後直隸派没落するや辭職して日本に亡命す。

五九

(才) 温

運動及一九一〇年の國會連開運動に際し活躍大いに努め爲に官憲より地方の治安を授けられたものとして捕へられ新郷に追放せらる新郷に於ても亦官憲の忌諱に觸れ將に西蔵に追放せられんとせる處一九二二年第一革命起り青年を集めて獨立を宣したるも失敗に移り天津に歸る。第一國會に衆議院議員となり國民黨に加入す。議會解散せらるるや追放せられて山東に逃れ續いて上海に赴き袁世凱反對運動を繼續す。袁の死後復會を期せらるるや再び衆議院議員たりしが強硬なる政府反對者として一九一七年又々追放せられ廣東に到り廣東軍政府に入る。其後北伐し一九二〇年の安直戦争及一九二二年の奉直戦争に際しては直隸派參謀たり。一九二三年國會招集せらるるや三度衆議院議員となり全民政を率ゐて直隸派の爲活躍し直隸派没落と共に引退す。

温 崇 (萬) 温 (萬) 廣東省台山縣人。一八七九年生。國立北京大學工科學長、國立北京大學地質系教授、中央造幣廠技正に歴任。

温 崇 (欽甫) 温 (欽甫) 廣東省台山縣人。一八七六年生。香港星洲仁學院卒業後支那最初の米國留學生として渡米す。一九〇三年歸國廣東に在りて諸要職に歴任す。一九〇八年西蔵に於ける英支通商問題に關し英國政府と協定の爲英藏訂約副大臣として唐紹儀に従ひて印度に派遣せられ條約訂結後駐藏參贊大臣として拉薩に駐在す。其後兩廣總督洋務顧問、外務部參議たりしが第一革命勃發するや革命派に加はり一九一一年上海光復軍政府全國外交副使として伍廷芳を助けて北方代表唐紹儀と南北和平を議す。一九二二年南京軍政府組織せらるるや駐滬通商交涉使に任ぜられ粵春館の國民黨に加はり副會長となる。第二革命起るや革命軍を援助し袁世凱の帝制運動に反對して岑春煊を助けて廣東軍政府に參

六〇

加し軍事院外交副使として上海に駐在す。其後廣東軍政府の外交部長となり一九二〇年には廣東軍政府總裁に選ばれ上海に於ける南北和平會議に南方總代表たり。同年陳炯明廣東を占領し國民黨員を追放するや上海に去り爾來上海に隱棲す。

温 泰 (慶立) 温 (慶立) 廣東省台山縣人。一八九二年生。日本東京帝國大學醫學部卒業。少將、第一集團軍醫務長。

温 萬 慶 温 (萬) 廣東省台山縣人。一八九五年生。米國に留學す。國民政府南京政府後財政部秘書、工商部全國商標局長等に歴任し實業部成立後同部秘書たりしが一九三二年末政變に依り降任。宋子文の親戚。

温 秉 (壽司) 温 (壽司) 廣東省台山縣人。一八六〇年生。米國ワシントン大學及ロムビア大學卒業。光緒初年歸國後在鎮江米國領事館通譯。兩廣總督周馥及端方の通譯秘書となり端方の歐米巡遊に隨行す。其後鎮江及天津の洋務局總辦を経て民國成立後任南京外交部次長。一九二〇年任北京外交部顧問。一九二四年任廣東大元帥府外交部次長。一九二八年任蘇州海關監督兼蘇州交涉員。一九二九年交涉員發官と共に職を辭し陸海空軍總司令部顧問を兼任し一九三二年總司令部廢止後は海關監督に専任す。宋子文の伯父。

温 維 飛 温 (維飛) 現に立法院編譯處編輯たり。

## カ之部

喀拉桑達旺吉勒札木蘇世勳 (Karasandawangchileetmurza (Shih-han)) 伊克昭盟鄂托克旗人。一八九九年生。世襲札薩克郡王。

戈 公 權 戈 (公權) 江蘇省東台縣人。一八九一年生。一九二二年上海時報記者となり次で主筆として一九二七年迄在任す。

一九二七年外遊し歐米及日本を遊歴し一九二九年歸國し任「申報」社副主筆。一九三二年國際聯盟支那調查團團員として滿洲に入る。更にジュネーヴにも出席す。會議終りて後西班牙に於ける新聞大會に出席し更に歐洲各國の新聞事業を視察すること二年。一九三五年十月死去。著書『新聞學概要』『中國報史』其他。

戈 定 (道) 戈 (道) 浙江省衢縣人。浙江法政大學及日本早稻田大學卒業後渡歐し各國の法律政治を研究の上ハバロフスク領事、行政院秘書、軍政部陸軍軍法司長、軍需司長、立法院委員、長慶鹽運公署長を経て一九三六年任監察院政務委員會委員兼秘書長。

何 曼 冷 何 (曼冷) 福建省閩侯縣人。一八九四年生。米國オハイオ大學農學士。國立中央大學農學院植物病組主任兼副教授。

何 燮 (南孫) 何 (燮) 江蘇省鎮江縣人。一八七七年生。監生。星洲江全學務處總辦、縣務總局總辦、星洲江蘇第一等秘書、江蘇撫署外交科參事、江蘇都督府秘書、國務院秘書、星洲江蘇江蘇尹、農商部秘書、內務次長、平政院評事等に歴任。

何 育 泰 (時吉) 何 (時吉) 浙江省慈谿縣人。一八八二年生。京師大學堂師範館、マンチエスター大學卒業。京師大學堂教員、國立北京大學物理學系教授、副主任、北京師範大學講師、東北大學物理學系教授、副主任を経て現に國民政府交通部參事。譯書『自然之機械』。

何 廣 (慎其) 何 (慎其) 廣東省興寧縣人。一八八三年生。日本東京帝國大學法學士。廣東高等法院首席檢察官、國民政府最高法院推事に歴任。

何 雲 (玉龍) 何 (玉龍) 浙江省平陽縣人。陸軍講武堂卒業。黃埔陸軍軍官學校教授、浙江省政府軍事廳副官長、杭州市政府公安局長、上海市公安局督察長等に歴任す。

何 運 (漱石) 何 (漱石) 湖北省武昌縣人。米國シカゴ大學哲學博士。曾て國立中央大學理學院心理學系副教授たりき。

何 衍 璋 何 (衍璋) 廣東省高要縣人。一九〇二年生。佛國里昂大學數學科卒業。大夏大學數學教授、國立中山大學數學天文學系教授兼主任に歴任。現に國立中山大學數學天文學系教授兼理學院々長。數學に關する著書あり。

何 益 三 何 (益三) 山東省桓台縣人。一八九九年生。久しく直魯聯軍方々昌の部下たり。一九二八年劉珍年對劉志陸の戰闘に功ありて劉珍年軍旅長に任ぜられ次で師長に昇任す。一九二九年奉張宗昌共和同盟軍を興すや劉珍年を輔けて張宗昌軍を破り部將の積玉侯を爵にす。同年劉珍年軍政編後劉の下に副師長となり一九三〇年秋芝罘市長に就任せるも間もなく市政府撤廢に依り第二十一師副師長に復職す。

何 應 欽 (敬之) 何 (敬之) 貴州省興義縣人。

(カ) 喀、戈、何

六一